ISSN　0387—3188

平成二十六年五月三十一日発行

萬葉

萬葉学会

畸形の文法……品田悦一(一)
——近代短歌における已然形終止法の生成——
出典としての『千字文』……奥村和美(二)
——『萬葉集』の歌と文章——
書評
村上桃子『古事記の構想と神話論的主題』
の問いかけるもの……上野誠(三)
報告……(四〇)
予告……(四五)

第二百十七号
平成二十六年五月

第二百十六号　目次

翻訳語の射程……内田賢徳
——古事記「心前」・萬葉集「無暇」——
石中死人歌の構成……茂野智大
——「われ」の視点と方法——
天平四年西海道節度使を見送る歌……小田芳寿
巻一巻頭歌の作者をめぐって……坂本信幸
報告

畸形の文法

——近代短歌における已然形終止法の生成——

品田悦一

一　擬似古典語法

近代短歌に使用される文語——古典のことばづかいを規範とする文章語——の語彙や語法には、古典に実例がなかったり、あっても使い方が食い違っていたりするものが少なくない。

一例を挙げよう。格助詞「の」を次のように使うのは、明治以降の短歌ではごくありふれた用法だが、古典和歌の世界ではまず目にしないものだ。

ア　河の洲のたふれし蘆にふりおけるはだらの雪の●紫に見ゆ　〔与謝野寛〕

イ　晩秋の黄なる夕日のうすれたる名残りの空に雲の●うかべり　〔金子薫園〕

ウ　つかれたる皮膚にしづかにこほろぎのねの●ひびくなり独りねの夜　〔前田夕暮〕

エ　春白昼ここの港に寄りもせず岬をすぎて行く船の●あり　〔若山牧水〕

オ　手套を脱ぐ手ふと休む
　　何やらむ
　　こころかすめし思ひ出の●あり　〔石川啄木〕

右のア〜オで傍点を付した「の」はどれも平叙文の主語を示しており、それぞれの「〜の」を受ける述語は末尾が終止形になっている（太字部）。

本誌の読者にとっては釈迦に説法かと思うが、念のために確認しておこう。古典和歌や古い和文に現れる「の」にも主語を示す用法はあるが、それらは、

A　夕されば物思ひ増さる見し人の●言問ふ姿　〔見之人乃言問為形〕面影にして　〔『万葉集』巻四・六〇二〕

B　たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば〔日能久礼由氣婆〕家をしそ思ふ　〔同・巻十七・三八九五〕

のように、従属句中で使われるか、

C　我がかざす柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ〔風尓加妹之梅乃散覧〕　〔同・巻十・一八五六〕

D　近くあれば名のみも聞きて慰めつ今夜ゆ恋のいや増さりなむ〔今夜従戀乃益々南〕　〔同・12・三一三五〕

のように、疑問文または詠嘆文（連体形止め）で使われる場合に限られる。平叙文で文全体の主語を表わすには、「雲、うかべり。」「行く船、あり。」のように、格助詞をつけず名詞だけとするのが普通だ。

では、「雲のうかべり」「行く船のあり」といった語法はどうやって成立したか——発想のおおもとには現代の口語（正確には口語体の文章語。話しことばに近いスタイルの書きことば）があると見て間違いないだろう。つまり、「雲がうかんでいる」「行く船がある」などと、いったん口語で発想した表現を文語に言い換えようとしたとき、「雲うかべり」「行く船あり」では音律を満たさないし、かといって、「雲がうかべり」「行く船があり」では「が」が口語的に響く。そこで「が」を「の」に差し換えるという処理が無意識になされた、というのがおおまかな筋道ではないだろうか。

もう少し立ち入っておこう。現代口語の格助詞「の」にも主格の用法があるが、それが使えるのは、「雲のうかんでいる空」「行く船のある岬」のような、連体修飾句の中に限られるから、ア～オのような語法が口語「の」から直接生じたとは考えにくい。発端はあくまで「が」なのであり、「が」の性質が、「の」という、現代語では主格としての使用頻度が低いためにいくらか古風に響く助詞に投影された結果、一見古そうで実は新しい語法が成立した、という次第なのだ。

大切なのは、これを単なる「誤用」として切り捨てないことだろうし、じっさい切り捨てられるものではない。「～の……終止形」というこの語法は、多くの歌人が百年以上にわたって襲用してきた結果、近代短歌の文法事項の一つとしてすっかり定着してしまっている。変なたとえだが、他人の所有地を長年不法占拠してきた人に占有権が発生してしまうのと、この一件はどこやら似ているところがあるかもしれない。

古典和歌のことばづかいを模倣しながらも、現代語に干渉されるなどして新たに成立した語法——この種の語法を「擬似古典

語法」と呼ぶことにしよう。

二　已然形露出——牧水・白秋と茂吉

文末や句末に活用語の已然形を据える語法も擬似古典語法の一つに数えてよいだろう。斎藤茂吉（一八八二～一九五三）は、第一歌集『赤光』（一九一三年、東雲堂書店、全集1）でこれを頻繁に使用した。

カ　ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひにつつしづ
　心なけれ　〔一九一三年作、『赤光』所収〕
キ　はつはつに触れし子なればわが心今は斑に嘆きたるなれ　〔一九一三年作、同〕
ク　目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に恋ふるもさみしかるかな　〔一九一〇年作、同〕
ケ　たまたまの現しきときはわが命生きたかりしかこのうつし世に　〔一九〇九年作、同〕
コ　このこころ葬らんとして来りぬれ畑には麦は赤らみにけり　〔一九一三年作、同〕
サ　めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり　〔一九一三年作、同〕

それぞれ太字にした箇所が已然形になっている。

初めの二首、カとキでは、「なけれ」と「なれ」がそれぞれ一首全体の末尾に位置するから、そこで文が切れているように見える。しかし上に係助詞「こそ」はないので、いわゆる係り結びではない。

次のクとケでは、已然形がともに一首の中途に位置している。クの第一句「目を閉づれ」は、そこで文が切れるのでは歌意をなさないから、〈目を閉じると〉の意で下へ続く句、つまり順接の確定条件句と見るのが順当なところだろう。文語で順接確定条件を表わすには、已然形に接続助詞「ば」をつけて「目を閉づれば」などとするのが通例だが、ここでは「ば」がつかず、已然形が剥き出しのまま条件句を構成していることになる。一方、ケの場合、第五句「このうつし世に」はいわゆる倒置句で、意味上は第四句「生きたかりしか」に係るようだから、この第四句はカ・キと同様、そこで文が切れるケースと見られる。

カ・キ・ケのようにそこで文が切れる用法を「已然形終止法」、クのように下へ続く用法を「已然形条件法」と呼んで区別するとともに、一括して扱う際には「已然形露出」と称することにしたい。(1)

この区別は、しかし、実地に適用しようとすると必ずしもうま

く行かない。特に茂吉の場合、コ・サのように、終止法なのか条件法なのか判然としない事例――そこで切れると見ても、下へ続くと見ても、歌意がそれなりに通ってしまうケース――があまりに多い。

私の数えたところでは、初版『赤光』に収録された短歌八三四首に已然形露出は三七例ある。そのうち、カ・キのように一首の末尾に位置するものは一七例で、これらはさしあたり終止法のように見えるが、一首の中途に位置する二〇例の場合、終止法または条件法と決定できそうなものは実は右のク・ケだけで、他の一八例はどちらとも解せそうなものばかりだ（→稿末の別掲資料Ⅰ）。この点を重視して、なおかつ全体を統一的に把握しようとすれば、茂吉短歌における已然形露出は総じて曖昧な語法なのだ、と考えざるをえないだろう。カ・キのような事例についても、終止法と決めてかかるのではなく、何事かを言いさしたまま黙り込んだような、煮え切らない口吻を感じ取るべきなのだろうと思う。

拙著『斎藤茂吉』でサの「めん雞ら」の歌に言及した際、已然形露出の表現上の効果について私はこう書いた。

> もし条件句なら「砂あび居れば」、終止句なら「砂あび居たり」で済むところで、そのほうが歌意も明確になる。そこにあえて「砂あび居たれ」と耳慣れない語法を据えたことで、読者の違和感が掻き立てられ、雌鶏らの砂浴びは何か得体の知れない事象のように印象づけられる。
>
> （品田悦一『斎藤茂吉』二〇一〇年、ミネルヴァ書房）

「耳慣れない語法」という見方は基本的に有効だと今でも思っているが、それだけでなく、曖昧さや煮え切らなさという面にも注意を払うべきだったようだ。そしてその場合、已然形露出が喚起するものは単なる「違和感」である以上に、中途半端で落ち着かない感じであり、またそこから来る不安感でもあるということになりそうである。立ち入った説明は省くが、この点は先のカ～サをとっくり読み直すことで確認できるものと思う。

では、茂吉はどうやってこの語法を手に入れたのか。

近代歌人で已然形露出を最初に使用したのが誰であるかは、はっきりしない。落合直文（一八六一～一九〇三）と正岡子規（一八六七～一九〇二）については全集に当たってみたが、使用例は見当たらなかった。与謝野晶子（一八七八～一九四二）の『みだれ髪』（一九〇一年刊）には、全三九九首中に一首だけ、「痩せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を泣く子と神よ見ますな」というのがある。さらに、一九一四年刊行の尾山篤二郎『大正一万歌集』

（岡村書店）を通覧したところ、茂吉より年上の歌人の作では太田水穂（一八七六～一九五五）の「武夫の矢筈が岳の峯さらずいざよふ雲に入り日さし**ぬれ**」が唯一の該当例だった。もちろん、調査の範囲を拡げれば事例は増えるだろうが[2]、茂吉より上の世代に多用した歌人はいないと判断してよさそうである。

注意されるのは、ほぼ同世代の若山牧水（一八八五～一九二八）と北原白秋（一八八五～一九四二）がときどき使用していた点である。この二人はともに茂吉より三歳年下だが、歌壇へのデビューは早かったので、茂吉は彼らに影響されたのかもしれない。ここでその可能性を検討しておこう。

すでに指摘されていることだが、牧水と白秋の作に見られる已然形露出は、

シ　わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲むよりうらさびし**けれ**　〔『路上』一九一一年刊、若山牧水全集2〕

ス　白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかり**けれ**　〔同〕

セ　夏の日は女役者のものごしのなまめかしさに似てさびし**けれ**　〔『桐の花』一九一三年刊、白秋全集6〕

ソ　向日葵向日葵囚人馬車の隙間より見えてくるくる輝きに**けれ**　〔同〕

など、形容詞または助動詞「けり」の已然形、つまり「～けれ」という形になるケースが大多数を占める[3]。しかも、終止法であることが明白なものばかりで、条件法の例や、茂吉の作に見られるような曖昧な使い方をしたものはほとんどない[4][5]。

王朝以降の古典和歌では、形容詞および「けり」は係助詞「こそ」の結びとして「～けれ」という形をとる頻度が高く、「コソケレ形式」とも呼ばれる常套的な表現パターンが成立していた。一例として、助動詞「べし」に「けり」がついた「～べかりけり／～べかりけれ」について見ると、勅撰八代集の場合、「……こそ～べかりけれ」という構文は、

E　おほかたに置く白露も今よりは心してこそみるべかり**けれ**　〔後撰・秋中・二九〇〕

F　梅の花にほふあたりは避きてこそ急ぐ道をばゆくべかり**けれ**　〔金葉・春・一七〕

G　今はわれ吉野の山の花をこそ宿の物とも見るべかり**けれ**　〔新古今・雑上・一四六六〕

など、二一例にのぼるのに対し、「こそ」のない「〜べかりけり」は、「今ぞ知るくるしき物と人またむ里をば離れず訪ふべかりけり」（古今・九六九）など九例にすぎない。同様に、牧水・白秋が親しんでいたと思われる西行『山家集』には、

H　我宿に花たちばなをうゑてこそ山ほととぎす待べかりけれ　〔夏・一八二〕

I　津の国の芦の丸屋のさびしさは冬こそわけてとふべかりけれ　〔冬・五八九〕

と、「……こそ〜べかりけれ」は二例を見るものの、「〜べかりけり」の例はない。

ここからどういう推測が導けるか——係り結びのシステムが存在しない現代口語の話者が、コソケレ形式による既成表現を無意識に変形させた、と考えてみてはどうだろうか。

たとえばこういうことだ。有名なスの歌を着想したとき、牧水は記憶の引き出しを掻き回して、H（またはI）の第五句を探り当てた。そしてその「待つ」（または「とふ」）を「飲む」に差し換えて、「飲むべかりけれ」という句に仕立てたのだが、当該句が「うゑてこそ」（または「冬こそ」）の結びであることには意識が向かなかった——見て来たような話なので割り引いて受け取っていただいてかまわないが、おおよそこれに近いことが作者の脳裏で生じたのだろうと私は思う。ちなみに、『路上』における該当例の大多数は、後に已然形以外の形へと改められている。

右の推測は、しかし、茂吉の場合には妥当しない。既述のとおり、茂吉の使用例は終止法の外側に大きくはみ出しているからだ。しかも、已然形となる語の種類もきわめて多岐にわたる。

【『赤光』初版に見る已然形露出の品詞別分布】

算用数字は用例数（1は省略）。

助動詞27（たれ7、けれ6、しか5、なれ3、つれ2、ぬれ2、ね、め）

形容詞6（紅けれ、愛しけれ、浅けれ、覚束なけれ、貧しけれ、なけれ）

動　詞4（現身さぶれ、閉づれ、すれ、極まれ）

『赤光』に見られる已然形露出、全三七例のうち、助動詞「けれ」は六例、形容詞も六例だから、「〜けれ」という形のものは合計一二例で、全体の三分の一弱でしかない。已然形露出の生成は、茂吉の場合、コソケレ形式の変形とは異なる筋をたどったと

見るべきだろう。

三　已然形露出——万葉・左千夫と茂吉

已然形露出と外見上そっくりな語法は、実は『万葉集』にも少数ながら存在する。この点を根拠に、万葉時代の語法を茂吉が復活させたと見る説があり[6]、茂吉研究家のあいだでは広く受け入れられているのだが[7]、私は賛成できない。この一件は、茂吉の創作活動をどう評価するかという大問題にも直結するから、やや詳しく見ていきたいと思う。

まず指摘すべきは次の点だろう。茂吉作歌における已然形露出が、外形・内容ともども万葉のそれと寸分違わないとしても、茂吉は決して万葉の語法を「復活」させたことにはならないはずである。というのも、四千五百首を超える万葉歌の中に、已然形露出はたかだか二三例を数えるにすぎないし、しかもそれらの大半は長歌に使用されていて、約四千二百首の短歌にはたかだか六例しか存在しないからだ（読み方が確定できなかったり、解釈に異説があったりするものを含む数。確実なものは長歌一五例、短歌一例。→別掲資料Ⅱ）。『赤光』はそれを、短歌八三四首中に三七例と、桁違いの頻度で多用するのだから、作者は万葉のことばづかいを正確になぞったのではなく、ことさら誇張してみせた格好である。

また通説では、『赤光』の已然形露出と『万葉集』のそれとが「強勢的終止法」として一括される[8]のだが、この扱いもまことに疑わしい。万葉の事例は、別掲資料Ⅱに示したように、一首の中途に現れるケースが圧倒的に多く、例外は一例にすぎないから（後述）、条件法が基調をなしていたと見るべきである。そしてこの点に関わる現象として、已然形となる語の種類も、散らばり方が『赤光』の場合とは大きく食い違っている。

【『万葉集』に見る已然形露出の品詞別分布】

算用数字は用例数（1は省略）。

助動詞16（ぬれ6、つれ3、れ2、ね2、め2、けれ）
動　詞7（来れ2、いませ2、たけ、告ぐれ、すれ）
形容詞0

万葉の事例では、完了の助動詞「ぬれ」「つれ」「れ」、および動詞「来れ」「いませ」が優勢を占めているし、またその理由は、新たな状態の発生を含意するこれらの語が、確定条件の提示という文脈と結びつきやすい点に求められるだろう[9]。『赤光』の事例にこういう傾向は認められない。そしてそれは、既述のような曖昧な用法が基調となっているからと見て間違いなかろうと思う。

要するに、『赤光』の已然形露出は『万葉集』のそれとは意味内容がかなりずれている。しかも興味深いことに、そのずれ方には、現代語の発想に干渉された形跡は認められないのだ。已然形露出を多用した茂吉は、現代語からも万葉語からも遠ざかろうとしていたように見受けられる。

茂吉の万葉理解を指導した人物としては、なんといっても師の伊藤左千夫を挙げるべきだろう。万葉の語法に愛着を持ったという点で、左千夫は茂吉よりはるかに徹底していた。そこで、当面の問題を左千夫の側から洗い直してみよう。

左千夫の歌には已然形露出の使用例がほとんどないとされていたのだが[10]、それは、調査対象が岩波文庫の『左千夫歌集』（斎藤茂吉・土屋文明選、一九二八年）に限られていたためであり、『左千夫全集』第一巻の全歌集を精査すると、長歌を中心にわりあい頻繁に使っていたことが確認できる。全集には長歌一二三首、短歌三一六八首、旋頭歌一六首が収録されており、已然形露出は長歌に一七例、短歌に一九例あって、その使用頻度は『赤光』には遠く及ばないものの、『万葉集』の数値をやや上回っているし、長歌に偏る傾向も万葉的といえる。先回りして言うが、左千夫の使用例を整理してみると、彼が『万葉集』の語法を意識的に摂取しようとしていたこと、またその際、『万葉集古義』の文法説に比較的忠実に従っていたことが判明する。

左千夫の万葉享受が本格化するのは、予約出版で売り出された活版の『万葉集古義』三一冊（一八九八年刊、吉川半七。以下『古義』と略称）を入手してからと見られる。左千夫は同書を通読し、一九〇〇年七月に読了した。それ以前には、

タ　紅葉せぬ山こそなけれ玉くしけ二荒の山につゝく山〳〵
チ　うぐひすの訪はぬ宿こそなかりけれ小梅の里の朝ののどけさ

など、コソケレ形式の歌をときおり作っていたのだが、この種のものは『古義』読了と前後して彼の作中から影をひそめ、代わって長歌の制作が増加するとともに、已然形露出の使用例がぽつぽつ現れるようになる。

一九〇一年の作から、長歌と短歌の例を一つずつ挙げておこう。

ツ　たまちはふ。亀井戸の。朝宮を。おろかみまつれ。みたらしを。清みかしこみ。あらたしく。作れる御井の。石がきの。い照るみかきに。秋萩の。諸枝咲垂り。白露の。千玉おきそへ。錦なす。うらくはしもよ。〔……〕

テ　あからひく朝日さしぬれこもりくの鬼蛇が池に鴨遊ぶみ
ゆ

ツの「おろかみまつれ（拝み奉れ）」は前後の文脈から見て明らかに条件法であり、〈参拝すると〉の意で下へ続くものと解される。他方、テの初二句は終止法とも取れなくはないが、一読して明らかなように、ここには柿本人麻呂「石見相聞歌」の一節「……天伝ふ入日さしぬれ〔天傳入日刺奴礼〕、大夫と思へる吾も、しきたへの衣の袖は、通りて濡れぬ」（『万葉集』巻二・一三五）が踏まえられているし、その「入日さしぬれ」は『古義』に「入日刺奴禮は、入日刺奴禮婆の意なり」と説明されている。左千夫はこの説明を読んでいたはずだから、テの「朝日さしぬれ」も条件法のつもりだったと考えてよいだろう。

『古義』は、右以外の已然形露出の事例についても、「婆をいはざるは、例の古詞なり」「古語のならひなり」といった説明を繰り返しており、「長歌にはことに多し」と付記した箇所もある。ただし例外が一つだけあって、それは、

J　……うつせみの世の人我も、ここをしもあやにくすしみ、行き変はる年のはごとに、天の原振り放け見つつ、言ひ継ぎにすれ〔伊比都藝尓須礼〕。〔万葉・18・四一二五〕

という、已然形が一首の末尾に位置する唯一の事例なのだが、『古義』はこれを、上に「ここをしも」とある「しも」が「こそ」に通ずるとの本居宣長説に従って、「こそ」の係り結びに準ずる形式と見なした[11]（→別掲資料Ⅱの⑳）。要するに、已然形露出に関する『古義』の基本的見解は、〈条件法としておもに長歌に用いる〉というものなのであった。

左千夫の歌に現れる已然形露出三六例のうち、私の算定では条件法は一九例、終止法は一七例を数える（→別掲資料Ⅲ）。『古義』の説に従ったにしては終止法が多すぎるように見えるが、已然形となる語の種類に注目することで疑問は氷解する。

【左千夫作歌に見る已然形露出の品詞別分布】

算用数字は用例数（1は省略）。

《已然形終止法17》
助動詞14（め10、らめ2、けめ2）
動　詞3（そびゆれ、あれ、栄ゆれ）
形容詞0

《已然形条件法19》

助動詞10（ぬ れ6、れ2、たれ、けれ）
動　詞7（聞ゆれ2、まつれ、すれ、見ゆれ、恋ふれ、出れ）
形容詞2（高けれ、うまけれ）

『万葉集』には、推量の助動詞「む」の已然形「め」が疑問詞を伴って反語となる語法が認められる。

K　予め人言繁しかくしあらばしゑや吾が背子奥もいかにあらめ〔奥裳何如荒海藻〕　〔巻四・六五九〕

Kの第五句の「あらめ」について、『古義』は「有めなり、あらむといふに同じ」と言い、「上に許曾などいふ辞なく、また下に受る辞なくして、牟といふべきを米と云るはいとめづらしけれど、古歌の偏格の一なり」と説明したうえで、類例として「誰が恋ならめ〔誰戀尓有目〕」〔巻二・一〇二〕、「誰恋ひざらめ〔孰不戀有米〕」〔巻三・三九三〕、「いづく行かめ〔何處行目跡〕」〔巻七・一四一二〕とともに、

L　斯太の浦を朝漕ぐ舟は由なしに漕ぐらめかもよ余志許佐流良米　〔巻十四・三四三〇〕

を挙げる。

このうちLは、実は「由こそあるらめ」の約であり、「こそ」の係り結びの類例として扱うべきものだが、『古義』はこれを「寄し来ざるらめ」の意に解し、「良米」は「良牟」に同じとした。つまり、終止形「む」が期待される文末に已然形「め」が現れるという現象について、文中に疑問詞があるという条件を見落としたまま、「む」は時に「め」で代用されると見なしたのだ。しかも、同じことが現在推量の「らむ／らめ」にも妥当すると説いた。

『古義』のこの説は現在では通用しないものだが、左千夫はこれを信じていたと見えて、彼の使用した已然形終止法は「め」が九例、「らめ」が二例までを占めている。過去推量の「けめ」二例も「む／め」「らむ／らめ」からの類推で使用したものだろうから、同類と見なしてよかろう。条件法の使用例には「め」「らめ」「けめ」がないという点も見逃せない。

左千夫の使用した已然形終止法一七例のうち、一四例までを占める助動詞「め」「らめ」「けめ」は、このように、已然形条件法とは成り立ちを異にする語法なのだった。これらを除外すれば、左千夫作歌における已然形露出は条件法一九例、終止法三例となるし、計二二例中一三例までは長歌における用例だから、〈条件法としておもに長歌に用いる〉という『古義』の見解を、左千夫

は――多少の混乱を伴いながらも[12]――かなり忠実に守ったと評せるだろう。万葉時代の語法を復活させたという言い方は、いくつかの付帯条件を要するものの、左千夫の場合なら妥当するように見える[13]。

茂吉にしても、意識という点に関する限りは左千夫とそう隔たっていなかったのかもしれない。「短歌の詞語に、古語とか死語とか近代語とかを云々するのは無用である。そんな暇あらば国語を勉強せよ。そして汝の内的流転に最も親しき直接なる国語をもつて表現せよ」（「歌ことば」初出一九一二年三月、全集9）と言い放った彼は、「国語」を「勉強」した成果の一環として已然形露出を愛用したのだろう。

しかし、古語を実地にどう使用したかという点では、茂吉は『古義』の文法説からも、それを順守した師の態度からも大きく逸脱していた。已然形露出を多用することを通して、彼は、『万葉集』に実在しない「万葉語」を新たに創造したのであった。手触りの粗い措辞を好む向きのためには、この「創造」を「捏造」と言い換えてもよい。「しづ心なし」という尋常まともな言い方をわざわざ「しづ心なけれ」と変形し、「嘆きたるなり」「砂あび居たり」で済むものをあえて「嘆きたるなれ」「砂あび居たれ」とねじ曲げてみせる茂吉の言語感覚は、異常な言い回しへの嗜好というべきものに裏打ちされていたはずだ。つまり彼の「勉強」は、文法規則を身につけることなどではなく、既成のことばの網の目をいかにしてずらすかという点にかかっていた。

読者である私たちが茂吉の「万葉語」から受け取るべきものは、何よりも、異常な言い回しが放射する不可思議な、奇異な[14]、そして戦慄的な感覚でなくてはならない[15]。

注

（1）本稿は正確には「已然形露出」を問題にしたものだが、副題に「已然形終止法」の語を用いたのは、インターネットによる検索等の便宜に配慮しての措置である。「已然形露出」は私が当座の必要に迫られて案出した用語にすぎないから、まだ社会的に認知されていないし、今後認知されるかどうかも多分に疑わしい。

（2）本稿脱稿後、『明治文学全集63 佐佐木信綱・金子薫園・尾上柴舟・太田水穂・窪田空穂・若山牧水集』（一九六七年、筑摩書房）を一覧したところ、已然形露出の事例は牧水のほか薫園（一八七六～一九五一）と空穂（一八七七～一九六七）の作にやや目立つとの印象を受けたが、精査する時間に恵まれなかった。

（3）京極興一「近代短歌における已然形止めについて」『国語と国文学』一九六〇年九月（↓『日本文学研究資料叢書 近代短歌』一九七三年、有精堂出版）。

（4）『路上』（収録歌四八三首）における該当例は全一一例。すべて「〜けれ」という形である。シ・ス以外の九例は左記のとおり。

高空に雲のうかべるあめつちのありのすさびも身にさびしけれ
虫けらの這ふよりもなほさびしけれ旅は三月をこえなむとする
かかる時ふところ鏡恋しけれ葉の散る木の間わが顔を見む
秋の日の空をながるる火の山のけむりのすゑにいのちかけけれ
つらかりしもののおもひでなつかしくなりゆくころもうらさびしけれ
ふうらりとふところ手して住み馴れぬ門を出づるはうらさびしけれ
かもめかもめ空に一羽が啼くときは水に入らむと身のかなしけれ
かれ草のなかに散りたる楢の葉をひろはむとして手のさびしけれ
思ふとなく思はることさびしけれさもなき友の死にゆきしとぞ

（5）『桐の花』（収録歌四四六首）における該当例は全五例。うち四例までが「〜けれ」という形。セ・ソ以外の三例は左記のとおり。

蟾蜍幽霊のごと啼けるあり人よほのかに歩みかへさめ
武蔵野のだんだん畑の唐辛子いまあかあかと刈り干しにけれ
なまけもの昼は昼とてそことなきびんつけの香にも涙してけれ

（6）注3に同じ。

（7）『日本近代文学大系43 斎藤茂吉集』（一九七〇年、角川書店）四二四ページ（本林勝夫執筆による補注一二）、西郷信綱『斎藤茂吉』（二〇〇二年、朝日新聞社）一二七ページ（第五章注1）にそれぞれ肯定的に引用されており、前掲『日本文学研究資料叢書 近代短歌』（↓注3）では編者の藤岡武雄が梗概を紹介している。

（8）早く佐伯梅友『奈良時代の国語』（一九五〇年、三省堂）に、万葉の已然形露出を「言い放つ」語法とする説があって、上代語研究者のあいだにもこれを支持する向きがある。新編日本古典文学全集版『万葉集』の頭注もその一例（↓注11）。

（9）確実と見られる一六例のみを対象とすれば、品詞別分布は助動詞11（ぬれ5、つれ3、れ2、けれ）、動詞5（来れ2、いませ、告ぐれ、すれ）となって、状態の発生を含意する語詞の出現頻度はいっそう高まる。

（10）注3・6に同じ。

（11）鉄野昌弘氏によれば、この七夕歌は越中における家持の孤独感を暗示する作なので、末尾の「言ひ継ぎにすれ」の語気は、「われら地上の人間も（牽牛織女の稀な逢瀬を）語り草にするのだが……」と、条件句を提示したまま続きを言いさしたように解されるという（直話）。これに従えば、万葉の已然形露出はすべて条

件法で、終止法の例はないことになる（↓注8）。

(12) 已然形終止法の残り三例は、別掲資料Ⅲの8・16・29。このうち8は直前の助詞「し」を「こそ」に準ずると解していた可能性があるだろう（↓別掲資料Ⅱの⑳）。16は代名詞のつもりかとも思われるし、29は条件法と解せなくもない。

(13) ただし、その左千夫ですら、万葉の文法全般に関する理解という点ではかなり怪しげである。たとえば一九〇一～〇三年、すでに『古義』を通読していた時期に制作された次の五首を見よ（ともに左千夫全集1）。

くかね髪にほへる児等が氷遊すも。ゆふだゝみ手に手たづさへ楽しけらしも。

百たひも見さかむ山を雨風のあるらくなべに顧みもせず。

久方の雨は降るかも大王のめす山川をいやくはしべみ。

垂乳根のおやに云へめや失なへる恋にたえずて河豚くへるともさみだれは早も止めやも芋や茄子や葉草むしつゝ畑荒れむとす

(14) 北原白秋は、『赤光』を一読したときの感激を後にこう回想している。「私は驚喜して、心から推讃の私書を送つた。不可思議な奇異な感覚、何よりも先づその奇異な感覚にうたれて了つたのであつた。それに万葉の古調は却て別種の清新さを以て私に迫つた」。「是より先、私は梁塵秘抄を耽読して、その古風の言葉と形式とが作る一種特別な金色の円光の環に惚れぼれと喜び涵つてゐた。万葉の古語もさういふ意味で、私に極めて珍奇に響いたのであつた」（「斎藤茂吉選集序」、北原白秋選『斎藤茂吉選集』一九二二月一月、アルス）。

(15) 本稿は、二〇一三年十月十二日に東京大学本郷キャンパスにおいて開催された、万葉学会第六十六回全国大会における講演の内容をまとめたものである。並行して準備していた拙著『斎藤茂吉異形の短歌』（二〇一四年二月二十五日刊、新潮選書）の第四章前半とまったく同内容となってしまったが、同書では割愛せざるをえなかった注が補充できたこと、数値の誤りが訂正できたこと、また編輯部のご配慮により別掲資料Ⅰ～Ⅲが付載できたこと、この三点において、学術論文として改めて公表する意義はあると思う。

参考文献

『日本歌学全書 第八編』一八九一年、博文館。
『左千夫全集 第一巻』一九七六年、岩波書店。
『落合直文著作集』全三冊、一九九一年、明治書院。
『白秋全集 6』一九八五年、岩波書店。
『斎藤茂吉全集 第一巻・第九巻』一九七三年、岩波書店。
『子規全集 第六巻』一九七七年、講談社。
『若山牧水全集 第二巻』一九九二年、増進会出版社。

別掲資料Ⅰ　『赤光』初版における已然形露出

《一九〇七年作》

1 留守もりて入り日紅けれ紙ふくろ猫に冠せんとおもほえなくに

《一九〇九年作》

2 青山の町かげの田の畔みちをそぞろに来つれ春あさみかも
3 蜩のかなかなかなと鳴きゆけば吾のこころのほそりたりけれ
4 たまたまの現しきときはわが命生きたかりしかこのうつし世に
5 やみ恍けおとろへにたれさ庭べに夕雨ふれば嬉しくきこゆ
6 日を継ぎて現身さぶれ蟬の声も清しくなりて人うつくしも
7 玉ゆらにほの触れにけれ延ふ蔦の別れて遠しかなし子等はも

《一九一〇年作》

8 夕がらす空に啼ければにつぽんの女のくちもあかく触りぬれ
9 目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に恋ふるもさみしかるかな
10 公園に支那のをとめを見るゆゑに幼な妻もつこの身愛しけれ
11 をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細りたるなれ

《一九一一年作》

12 この宵はいまだ浅けれ床ぬちにのびつつ何か考へむとおもふ
13 なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に吾は言へりしか
14 何も彼もあはれになりて思ひづるお国のひと世はみぢかかりしか
15 春浅き麦のはたけにうごく虫手ぐさにはすれ悲しみわくも
16 あぶなくも覚束なけれ黄いろなる円きうぶ毛が歩みてゐたり
17 青葉空雨になりたれ吾はいまこころほそほそと別れゆくかも
18 女の童をとめとなりて泣きし時かなしく吾はおもひたりしか

《一九一二年作》

19 はるばるも来つれこころは杉の樹の紅の油に寄りてなげかふ
20 あが友の古泉千樫は貧しけれさみだれの中をあゆみゐたりき
21 もの書かむと考へゐたれ耳ちかく蜩なけばあはれにきこゆ
22 もも鳥はいまだは啼かね海のなか黒光りして明けくるらむか
23 わが歩みここに極まれ雲くだるもみぢ斑のなかに水のみにけり
24 はるばるも山峡に来て白樺に触りて居たり独りなりけれ

《一九一三年作》

25 はつはつに触れし子なればわが心今は斑らに嘆きたるなれ
26 この朝け山椒の香のかよひ来てなげくこころに染みとほるなれ
27 しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよと言ひて寄りしか
28 彼のいのち死去ねと云はばなぐさまめ我の心は云ひがてぬかも
29 このこころ葬らんとして来りぬれ畑には麦は赤らみにけり
30 麦の穂に光ながれてたゆたへば向うに山羊は啼きそめにけれ
31 ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひにつつしづ心なけれ
32 みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞいそぐなりけれ
33 湯どころに二夜ねぶりて蕈菜を食へばさらさらに悲しみにけれ
34 わが体にうつうつと汗にじみゐて今みな月の嵐ふきたれ
35 よごれたる門札おきて急ぎたれ八尺入りつ日ゆららに紅し

36 めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり
37 鳳仙花城あとに散り散りたまる夕かたまけて忍び逢ひたれ

別掲資料Ⅱ　『万葉集』における已然形露出と『古義』の説明

《　》内が古義の記述。
×は『古義』が誤解したもの。

×1・五〇「天地も縁りてあれこそ〔縁而有許曽〕……玉藻なす浮かべ流せれ〔浮倍流礼〕」
《浮倍流禮は、浮べ流せればの意なり、婆といふ意なるに、婆をいはざる例は、集中に甚多し、（長歌にはことに多し、）》
＊前の「天地も縁りてあれこそ」の結びとは解さなかった。

①2・一三五「天伝ふ入り日さしぬれ〔入日刺奴礼〕……」
《入日刺奴禮は、入日刺奴禮婆の意なり、一巻營二藤原宮一役民歌ノ、浮倍流禮とある下に委云り、》

②存疑2・一六七「いかさまに思ほしめせか〔何方尓御念食可〕……朝言に御言問はさず、日月の數多成塗、そこ故に皇子の宮人行方知らずも」
《數多成塗は、マネクナリヌレと訓べし、ヌレは、ヌレバの意なり、》
＊「思ほしめせか」は挿入句のように解し、《御念しめせばかの意なり、この句の下に、今一つ詞を加へて、何方爾御念食可云々ありけむ、と意得べし》と説く。
＊「數多成塗」は玉の小琴・山田講義・全注巻二などに従ってマネクナリヌルと訓じ、「思ほしめせか」の結びと解すべきだろう。

③2・一九九「大雪の乱れて来れ〔乱而来礼〕……」
《亂而来礼は、〔……〕亂て来ればといふなり、本居氏、きたればといふべきを略きて、きたれと云は、長歌の中に殊に一格なり、すべて上と下と、事の轉ずる所の境には、如此いふ古の長歌の常なり、師ノ考に、者は補て、クレバと訓れたるは、中々にわろしと云り、（但しきたればといふべきを略きて、云々と云るはいさゝかわろし、者はいはでも、もとよりしか聞ゆる古語なれば、ことさらに略きたるものにはあらず、さてこは御方の箭の事をいへるなれば、亂而行れといふべきやうなれども、こゝは敵方になりて、しか云るなり、一巻に、倭尓者鳴而歟來良武、と云る歌の來と、意味ひとし、相照べし、）》

④3・四六〇「晩闇と隠りましぬれ〔隠益去礼〕……」
《隠益去禮は、隠り座ぬれぱの意なり、》

⑤3・四七一「家離りいます吾妹を留めかね山隠しつれ〔山隠都礼〕精神もなし」
《山隠都禮は、山隠つれぱの意なり、佐保山に葬埋たるを云り、》

⑥3・四七五「ひさかたの天知らしぬれ〔天所知奴礼〕……」
《天所知奴禮は、薨坐るをいふ、上に出たり、奴禮は、ぬれぱの意

なり、》

⑦5・七九四「うちなびき臥やしぬれ〔許夜斯努礼〕……」

《許夜斯努禮は、臥ぬればの意なり、臥賜ひぬればと云如し、こゝは、身まかりたる形を云るなり、（略解に、禮の字の下に、婆字脱たるか、といへるは、いみじき非なり、かゝる處に、婆の言をいはぬは古格なり、）》

＊続けてコヤスをコヤルの尊敬体と説く。

⑧5・八〇四「留みかね過ぐし遣りつれ〔周具斯野利都礼〕……」

《周具斯野利都禮（具字、活字本に其と作るはわろし、凡て過すを、スゴスと云は、古言にあらざればなり、）は過し遣つればの意なり、婆の言のなきは、例の古風なり、》

⑨5・八九四「遣はされ罷りいませ〔麻加利伊麻勢〕……」

《麻加利伊麻勢（異本に、伊の下に、弖字あり、さらばイデマセと訓べけれど、猶舊本に従べし、）は、罷坐者の意なり、者を云ざるは古風なり、》

⑩5・九〇四「たまきはる命絶えぬれ〔伊乃知多延奴礼〕……」

《伊乃知多延奴禮は、命絶ぬればの意なり、婆をいはざるは、例の古詞なり、》

⑪存疑7・一二六六「大舟を荒海に漕ぎ出で八舟たけ〔八船多氣〕我が見し児らがまみは著しも」

《八船多氣は、契沖、八船、こゝにてはおほかる數にはあらず、八度舟をたくといふ心なり、舟たくは、海のあらき所にて、舟のあやふきを、ちからをくはへてしのぐ心なり、土佐日記に、ゆくりなく風ふきて、たけども〳〵しりへしぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし、といへり、と云り、（按に、八船の八は、彌の意なるべし、船を彌度多久義なるべし、）》《歌意は、父母などのまもりつよくして、たやすく見がたき女を、危く辛うして見しその女の、我に心をよせたりと云こと、その目もとにしるくあらはれて、嗚呼さても愛しく忘れがたしや、といふなるべし、父母などの常にきびしくまもるを、其をしのぎて、危く辛うして見たるを、舟を荒海に出して、風波の難にあひて、危き目を見たるに、漸その難を凌ぎたるに譬へたるならむ》

＊佐伯梅友『奈良時代の国語』（↓注8）に、④とともに「已然形で言い放つ」語法の事例として挙げるが、古義は上三句を序詞と捉える。「たけ」については連用形のように解したらしい。

⑫存疑11・二五二三「さにつらふ色者不出少なくも心のうちに吾が思はなくに」

＊第二句、旧訓イロニハイデズ、考・古義イデジ、新校・沢瀉注釈イデネ（↓12・二九一一）。

⑬存疑11・二五七一「ますらをは友の騒きに慰もる心毛将有我そ苦しき」

＊第四句、旧訓ココロモアラム、古義同じ。大系ココロモアラメ、

全集・新大系ココロモアルラム。

⑭存疑11・二七四一「大海に立つらむ波は間将有君に恋ふらく止む時もなし」

＊第三句、古・文・西などマモアラム、代初書入ヒマモアラム、略解アヒダアラン、古義アヒダアラム、大系アヒダアラメ。

⑮存疑12・二九三四「あぢさはふ目者非不飽携はり言問はなくも苦しかりけり」

＊第二句、旧訓メニハアケドモ、古義同じ。新校以下メハアカザラネ。

⑯17・三九六九「いたづらに過ぐし遣りつれ〔須具之夜里都礼〕……」

《須具之夜里都禮は、過し遣つればの意なり、》

⑰17・四〇一一「帰り来てしはぶれ告ぐれ〔之波夫礼都具礼〕……」

《之波夫禮都具禮は、咳告ればの意なり、老人のいひ出むやうなく、かなしく心にせまり、しはぶきまはり告るさま、みるやうによみなされたり、》

⑱18・四〇九四「金ありと奏したまへれ〔麻宇之多麻敝礼〕……」

《麻宇之多麻敝禮は、奏賜へればの意なり、賜は、尊む方にいふが定りなれど、尊き方に対ひて、自いふにも云る事多し、詔詞に、小田郡仁黄金在奏弖」献」云々、とあるこれなり、》

⑲18・四一一一「恐くも残したまへれ〔能許之多麻敝礼〕……」

《能許之多麻敝禮は、遣し賜有れば、の意なり、》

⑳18・四一二五「……言ひ継ぎにすれ〔伊比都藝尓須礼〕。」

《伊比都藝尓須禮は、代々言継に為れ、となり、さてこの終句、禮と結めたるは、上の許己乎之母とある、之母の辭、許曾に通ふゆゑなり、と本居氏説詳なり、〔詞玉緒に見ゆ〕》

㉑19・四一六〇「語り継ぎ流らへ来れ〔奈我良倍伎多礼〕……」

《奈我良倍伎多禮は、流来者なり、流は、傳と云が如し、奈我良倍は奈我禮の伸りたるにて〔……〕抑奈我留と云は、長く経行ことをいふ言にて、時代の経行にも、雨雪などの、天より降るにも云て、縦にも横にもいふことなり〔……〕さて者をいはざるは、古語の常なり、上に委云り、》

㉒19・四二一一「露霜の過ぎましにけれ〔過麻之尓家礼〕……」

《過麻之尓家禮、〔禮、官本に流と作るは誤なり〕は、死座にければの意なり、婆をいはざるは、古語のならひなり、》

㉓存疑20・四四〇八「惜しみつつ悲しびませば／悲しびいませ〔可奈之備麻世婆 元・広・西／可奈之備伊麻世 類・古・宮〕……」

《可奈之備伊麻世は、悲み座者の意なり、〔元暦本、拾穂本等に、伊麻世を麻世婆と作り、此は理著くて通え易き物から、中々古語のさまにあらず、後のさかしらと聞えたり、》》

別掲資料Ⅲ　伊藤左千夫作歌における已然形露出

通し番号に傍線を付したものは終止法と判断される事例。
×印を付したものは慣用句と見て計数外とした事例。

《一九〇〇年》

×春ノ日ノ芝居ハテツル折シモアレ小雨フリイデ、人ムレマドフ

1 ……「フランス」の。醜の国人。「ヲロシヤ」の。たふれ人等か。諸越の。唐になしたる。ひかことの。あしき行ひ。天にます。神も見たるか。大き世の。人も知りけめ。父を殺し。娘を辱しめ。背を殺し。妹をなふりて。あるかきり。たからを奪ひ。いたましき。悲しきことの。わさつくし。かきりつくしぬ。……

《一九〇一年》

2 つたへこし此家の名をくたせすといそしむ母か心はしらめ

3 あからひく朝日さしぬれこもりくの鬼蛇が池に鴨遊ぶみゆ

4 日之神の。めぐしまな子と。ひむがしに。しみ照る国は。民草の。こゝろまさとく。万の。物らさきはふ。瑞国と。名にしおひたれ。しかすがに。よろづの中に。いやたかに。ひでたる業は。塗物の。宇留志たくみぞ。……

5 たまちはふ。亀井戸の。朝宮を。おろかみまつれ。みたらしを。清みかしこみ。あらたしく。作れる御井の。石がきの。い照るみかきに。秋萩の。諸枝咲垂り。白露の。千玉おきそへ。錦なす。うらくはしもよ。……

《一九〇二年》

6 ……和田島と。名づく大岩。そゝり立つ。見えの奇しく。其島に。たぎつ白波。時しくに。美雪ちらへり。あかねさす。夕日さしぬれ。満汐の。いやますなかめ。しぬべども。言挙知らに。此浦の。よけくを見れば。なづみこし。旅のいたづき。やみにけるはや。〔結〕

7 あから引く朝日さしぬれ野官蘭（クロモジ）の朽し籬に陽炎のたつ

8 ……千早振。八幡の宮は。荒武き。畏き神そ。いにしへの。事にはあれと。御前なる。真杉之鳥居。杉なれば。朽ちもこそせめ。石ならば。とはにあらんと。さかしらの。醜つ郷人。おほろかに。思へるまにま。大石之。円石鳥居。そをよしと。立てし其夜に。なゐもせず。嵐もなくに。十尺石。八多義に打折れ。たふれたる。事のあやしさ。荒み神。怒りましぬと。石鳥居。悪ます神と。郷人等。おびえ畏み。真杉之。瑞の鳥居し。今にそびゆれ。〔結〕

9 ぬば玉の夢の間に下野もいつか過ぬれ白川の里。

《一九〇三年》

10 大御歌海を遊はす今年はや海の上より春も立つらめ

11 世の人もこゝろ尽せれ君もひて吾悲むはなほやまずけり

12 恋の歌よまんは今ぞまさこひに恋痩す君は神も許さめ

13 ならび咲藤と牡丹とをちかへり見まくほりすれなほもこずとや

×……衰し、国とはいへ、いや遠に、河も流るゝ、いや高に、山もそびゆる、広らにも、たぐひなき国、人さはも、たぐひなき国、……

14| 八街の高野の山はうまし茸かへけむ山とはに語らめ
15 16| ……蒼雲の、おほへる下の、ほのきらふ、千町の坊(ぜと)を、市人も、
未だ起きねば、ひむかしの、茅場の方よ、西行くや、芝浦かけて、
灯火さす、都押割り、色彩(イロアヤ)の、虹とも見ゆれ、旗霞(ハタカスミ)、二尾になび
く、一旗は、赤みに白らけ、一旗は、みとりに白らけ、あやしくも、
立てる霞か、空蟬の、世にしたふとき、にほひ霊(タマ)、持てる命等、紅
葉狩、二人携へ、今過ぎし、跡にかもあれ、心くき、朝のひらきや、
踏み乱る、市のさはぎの、おそくもあらぬか。〔結〕

《一九〇四年》

17 18 ……蒼雲を。ひたせる水も。極まれば。遂には落来。天照る。日
も傾けば。かきろひの。光衰ふ。釈迦牟尼や。道は高けれ。み教は。
尊とかれとも。とこみちに。みちてありえず。光はも。冷たる光。
形はも。影なす形。ひむかしの。八百国原の。もろ〳〵は。たのみ
失ひ。空蟬の。人の精神(こころ)は。月に日に。片に下(くだ)ちて。年毎に。すさ
みきにけれ。思ひ深く。心昂れる。救人。日知りの伴が。そこに憂
ひ。茲になげかひ。……
19| おほおぞのロシヤ夷は徒に地図うち見てぞ吾を知りけめ
× 天地のほろぼすと云へ徒にわなに斃れきあはれ増荒夫
× 他(ヒト)ぬたを臭しとを云へ自かぬたの臭味わかずかおぞの醜鼻
× かまつかをいやしとを云へ秋ふけて色さびぬれば飽なくおもほゆ
20 なまよみのかひの山べは家毎に串柿つれゝ乞へと売らずけり

《一九〇五年》

21| ひむかしの天の門出る初日仰ぎ世界の国等吾を思はめ。
× ×……遊子物思ふ　折しもあれ　／行く手に近き　舟一つ　／ぬし
は少女や　玉だすき　／歌ふは何か　つむはなに　／……／み国の
ためと　人は云へ　／少女心の　おろかにや　／一人の母を　たの
むぞと　／気なげに云ひて　別れにし　／悲しき人の　目に立ちて
……
22| 乳売の、吾はすべなみ、朝乳を、二時に搾り、夕乳を、一時に搾り、
此牛らを、つねいつくしみ、とりかくる、金椰毛椰、吾衣、毛臭く
あらめ、貧しき左千夫、〔結〕
23 すが〳〵し若葉の蔭の、朝戸出に状箱(フバコ)を見れば、はこぬちに光りみ
ちぬれ、怪しみて能く窺へば、練衣の白衣(ハクイ)ゆらがす、小さき天津使
女、左手に小鳥鳴かしめ、右手には書携へて、小鈴なす声に申さく、
……
24| たまはりし玉のこととりまとひ奈良人さびて楽しきを経め
25 秋の野に、置ける白露。白露の、千々に千くさに。世の人の、言は
聞ゆれ。理を、をみなは知らず。八百日日を、一日の如く。み仏に、
神にこひのみ。まさけくと、待てりし人の。軍止み、帰ると聞けば。
萩の花、ゑみさく色をつゝみかねつも。
26 27| ……犬の子は犬のわざせめ、／猫の子は猫のわざせめ、／犬の子
は何をくひ居る、／猫の子は何をくひ居る、／　蛇もくひ黄糞もく

はずや、……

《一九〇六年》

28| よき人の心とほれるみ教に吾世(ワガヨモ)百年楽しきを経め

《一九〇七年》

29| 千代田の大城の御垣、内日刺す高城が上に、吾見ても久に栄ゆれ、
うべしこそ大城が上の、常盤玉松。

30| しらたまの清女(すがしめ)君はかならずやわがしき島の春をめづらめ

31 家知らぬ君にし恋ふれしかすがに花に触れ来し清き思を

32 雨しとゞ、樹々の雫の、土に落ち、葉に落ち落つ、おとのみ、耳に
聞ゆれ、足もとに、霧はまつはる、笠の手に、雲はたゞよふ……

《一九〇八年》

33 ……神々の守(もり)らす吾家(わぎへ)は　日を安く夜を平けく　万世もかくてあらむと　嬉しもと思ひてあれば　見るもの眼(め)に楽しく　聞くもの耳に

たのしく　食物(をすもの)はなべてうまけれ　吾(あ)は三つよ吾(あ)は七つよと、丹(に)の頬(ほ)に笑(ゑ)みかたまけ　父を呼び母呼びさわぐ　天地は賑ひにけり　わが家のため〔結〕

34 水隈の淀みの底の心には思ひ恥ぬれ堰くすべもなし

35| うつそみにつまと云はなく心ぬちに相恋ふらくは神も許さめ

36 朝霜に風も動かねは日は出れ林の木霊未た睡れり

＊一九〇九～一三年、該当例なし。

《一九一三年》

×こと国をいやしとはいへ日本は臣(たみ)の命の塩(シホ)に税とるところ

（しなだ　よしかず・東京大学大学院教授）

出典としての『千字文』

――『萬葉集』の歌と文章――

奥村和美

はじめに

上代日本において『千字文』は、漢籍学習の際の初等教科書として、また成人後も書の手本として広く用いられたことが知られている。上代びとの知識の基層を形成した『千字文』が、『萬葉集』の歌の発想や文字表現に影響を与えたことについて、その一端を小稿「『千字文』の受容―『萬葉集』を中心として―」において既に述べた[1]。本稿は、それに引き続き、『千字文』の『萬葉集』における利用を具体的に検討することを通して、上代、『千字文』を学び、それに基づく文字表現をなすことにはいかなる意義があったのか、『千字文』が漢籍として有していた特異な性格についてさらに考察を深めようとするものである。

一

人目守る　君がまにまに　我さへに　夙興乍(はやくおきつつ)　裳の裾濡れ
ぬ　（11・二五六三　正述心緒）

この歌は、人麻呂歌集の旋頭歌、

朝戸出の　君が足結を　濡らす露原　早起(はやくおき)　出でつつ我も
裳の裾濡らさな　（11・二三五七　人麻呂歌集非略体歌）

に倣い短歌形式に仕立てた歌である。一晩女のもとで過ごした男が、早朝、家を出るとき、女もそれを見送りに出てともに露に濡れる風情を詠む。第四句の「夙」は、古くは「つとに」と訓まれていたが、もとの人麻呂歌集歌では「早」とあり、これによって「はやく」と訓むことは動かない。この「夙興」という文字表記について、すでに小島憲之氏が『毛詩』（衞風氓・大雅抑など）或いは『文選』（秋興賦注、寡婦賦など）に出典があることを指摘している[2]。稲岡耕二氏『全注　巻十一』はさらに限定して『文選』の「秋興賦」を踏まえたとし、その文字選択は「君」が官人であることを想像させる、と言う。『文選』の「秋興賦」の一節は、

夙興晏寝　匪遑底寧　（巻十三　晉・潘安仁〈岳〉「秋興賦」）

というもの。李善注に「毛詩曰、夙興夜寐」とあるように、「夙興」の出典は『毛詩』に遡る。『毛詩』にはいくつか例が見える。

夙興夜寐　靡レ有レ朝矣（衞風・氓）

鄭箋「無レ有レ朝者、常早起夜臥、非二一朝然一、言己亦不二解惰一」

夙興夜寐　無レ忝二爾所生一（小雅・小宛）

夙興夜寐　洒二掃廷内一　維民之章（大雅・抑）

例えば第二例や第三例は、朝廷に出仕する者の心構えをいうもので、君子たるべき者、朝早くから夜遅くまで勤めに励まねばならない、という。『萬葉集』で「はやくおく」を「夙興」と表記することは、これら『毛詩』の例を踏まえて、男が朝早く起きて出仕する官人であることを暗示しようとするものと考えてよい。「われさへに」とあるように「はやくおきつつ」の主体は女だが、男が早く起床するのにあわせて自分も、と詠むのである。男が人目を避けようとしているだけでなく、その文字によって勤勉な官人でもあることをも表そうとするのだろう。憲法十七条に、

群卿百寮早朝晏退。

（『日本書紀』推古天皇十二年四月　憲法十七条第八条）

とある規定に忠実であるような官人である。最終的に出典をどれか一つに絞ることには無理があるが、小島説を承けて稲岡説が言うように、出典のある文字を用いて一首にさらなる意味を込める、つまり含意することは間違いない。

ただし、『毛詩』の中から「夙興」の二字を取り出す、その文字選択じたいはそれほど特殊なものではない。『千字文』に次のように見える。

臨レ深履レ薄　夙興温清　（『千字文』65・66）

親や主君に仕えるときの心構えを述べた箇所である。『千字文』の語句は、多くが経書をはじめとする有名な古典から取られている。言うまでもなくこの「夙興」は、先掲の『毛詩』の「夙興夜寐」を典拠とする。初学者はまず『千字文』で「夙興」という語を知り、やがてもととなった『毛詩』へと学習を進める。すでに一定の教養を積んだ成人の場合は、『千字文』で「夙興」という文字を見れば、ただちに『毛詩』の例を想起することが期待されたはずである。そういう点で、「夙興」は、上代の知識人にとって漢籍学習の初期から学んだ非常に馴染み深い文字であったと言える。

さらに、『千字文』李暹注には簡単な訓詁と注釈があることが注意される。

夙、早也、興、起也。言臣之事レ君、常自試レ博（傅カ）、必須二晩臥早起一、昏定晨省、問二其寒温所一レ須。……

これによれば「夙興」が「早起」の意であることが学べる。先掲『毛詩』衛風の鄭箋でも「夙興」は「早起」と言い換えられていたが、『千字文』李暹注によればその訓詁は比較的簡単に知ることができる。「はやくおく」を正訓字で表記するとすれば、人麻呂歌集歌のようにまず「早起」となるであろう。『千字文』李暹注の渡来が奈良朝をいつ頃まで遡るのか定かではないが[3]、李暹注を通して「夙興」すなわち「早起」という知識が形成されていれば、人麻呂歌集歌の「早起」から逆に「夙興」の文字が導かれることは、『毛詩』鄭箋を参考にするまでもなくたやすいことだったと推測される。

確かに二五六三番歌の「夙興」の出典としては『毛詩』を指摘しておけば、訓詁注釈としては或る意味十分なのだが、そのような知識を教養として広く定着させていたものとして『千字文』の関与は看過できない。その点から言えば「夙興」という文字表現は決して奇を衒ったものではなく、漢籍についての深い造詣を必要とするものでもない。逆に『千字文』にも載る文字を用いるところに表記者のいささかの工夫と機知が感じられよう。つまり訓字として決して一般的ではないけれども、『千字文』で学んだ、誰もが知っているあの「夙興」という文字を使うというところに表記者のわずかばかりの得意がうかがわれるのである。

そして、『千字文』を『毛詩』のような一流の漢籍と上代びととをつなぐ一種の媒介、より直接的な出典として考えたとき、次の文字選択のしかたにはなお注意してよいのではないか。

三輪山を　然も隠すか　雲だにも　心あら南畝（なも）　隠さふべしや　（1・一八　額田王「下二近江国一時作歌」反歌）

第四句「心あらなも」の「なも」の漢字本文は「南畝」とある。「畝」を音仮名として用いるのは集中ここのみである[4]。「畝」を「武」とする古写本もあるが（類、西イ、京イ、矢イ）、澤瀉『注釈』が説くように「南畝」が「なむ」と訓まれ、その訓に引きずられて「畝」が「武」に換えられたと見るべきで、「南畝」が本文のもとのかたちであろう。この「南畝」について、つとに金子元臣『評釈』は、『毛詩』の字面の借用と指摘し、澤瀉『注釈』はそれを「おもしろい着眼」と紹介する。『毛詩』には、次のように見える。

同我婦子　饁二彼南畝一　（『毛詩』豳風・七月）
俶載二南畝一　播二厥百穀一　（『毛詩』小雅・大田）

「南畝」は南側の日当りのよい田のこと。仮に金子『評釈』の言うように『毛詩』に基づくのだとしたら、それは先述の「夙興」での『毛詩』の踏まえ方とは大きく異なる。集中、『毛詩』を踏まえる文字表現は他にも幾つか知られているが[5]、おおかた訓

字部分であって、このように漢字としての意義を捨象した仮名部分ではない。「夙興」も「はやくおく」の訓字表記であった。上代の経書の学習は音読から入るから、『毛詩』の一部を音仮名として用いる可能性がないわけではない。しかし、「南畝」の字面が、対応する日本語の意味や歌の内容と全く関連をもたない点で、なぜこの二字が特に選ばれたのかが理解しにくい。そこで参照したいのが『千字文』である。

俶載二南畝一　我藝二黍稷一　（『千字文』165・166）

とあり、前句には先掲『毛詩』小雅の句がそのまま取られている。『毛詩』の中でも『千字文』に取られた表現は上代びとにとってなじみ深いものであり、おそらく『千字文』の暗誦[6]を通して「南畝」は音とともに熟字として固く結びついていたと考えてよい。そのような条件のもとで初めて『萬葉集』において「南畝」をナモの仮名表記として用いることが可能になるだろう。もちろん、ナモの表記に「南畝」という文字を選択することは無意識のわざではない。知識人であれば誰もが『千字文』を通して知っているあの「南畝」という文字をあえて選択してみせるのであって、そこに文字表記上の遊戯性が認められる。それは長歌で「……山のまに　い隠る萬代（まで）　道の隈　い積もる萬代（まで）に……」（1・一七）とマデを「萬代」という熟字で仮名表記することと連続しつつ、出典をもつ文字を選択する点で知的遊戯性を色濃く漂わせる。この歌の表記者は額田王じしんか後代の編纂者か定かではないが、『千字文』の学習による文字の知識の広がりと定着ということを前提とすると、この「南畝」という文字に、漢籍の初歩的な知識に基づく意図的な選択とそれによる知的遊戯性を認めてよいのではないかと思われる。

二

次に、漢文の部分で、文字のありようから『千字文』を踏まえることが露わな例を取りあげてみる。

巻五に京の吉田宜が大宰帥大伴旅人に贈った書翰が載る。天平二年七月十日の日付をもつ書翰で、後半では、旅人から贈られた「梅花歌」と松浦川の贈答歌に対して称讃の念を表した後、それらの作品について、

耽読吟諷、戚謝歓怡

と記す。右は、ひとまず和泉書院の『新校注萬葉集』の本文によって示した。この「戚謝歓怡」について、小島憲之氏は「戚」の本文を採った上で、『千字文』の「感謝」とは意が異なり、「戚」は「親しむ、上司に対して恐懼する」の意であるとし[7]、『全集』以下諸注釈はその解に従う。一方、近時、天津師範大学の王暁平

氏は、ここは『千字文』の「感謝歓招」に基づいて、悲しみが喜びに変わったという意であると説く。[8] 王氏の論は、本文批判が十分とは言えず、語句の解釈が李暹注によるのみで訓詁を欠く。が、中国人研究者のその発言は、小島論がいったんは捨てた『千字文』との関わりについて、改めて検討し直すべきことを示唆している。また、そのように『千字文』を踏まえるのだとすれば、考察は、それが宜と旅人との書翰の贈答においてどのような意味をもつのか、ということに進まねばならない。

まず本文の問題から述べたい。「戚謝」の「戚」の部分、『萬葉拾穂抄』が「感」とし、『萬葉代匠記』（精）が「感」とする「或本」のあったことを記す。広瀬本の朱別筆書き入れにも「感」とある。しかし、古写本ではいずれも「戚」とあり「感」の本文はとることができない。おそらく字形の類似と文脈から、よりわかりやすい「感」に誤られたのであろう。

つぎに、「歓怡」の「怡」について。現行のテキストがそろって「怡」とするが、『校本萬葉集』に基づいて整理すると次のような異同が見える。

「怡」　宮、西、陽、温、矢、近、京、附、寛
「招」　広、細、無
「[illegible]」　紀

紀州本はかなり崩れた形だが、影印で確認すると「忄」（りっしんべん）でないことは確かで、後述するように「扌」（手偏）の「招」字である。『校本萬葉集』が「忄」の「怡」と判断した神宮文庫本は、影印で確認するとむしろ「扌」に近い。広瀬本は明らかに「扌」の「招」字である。つまり、紀州本と広瀬本の古次点本系及び仙覚寛元本の神宮文庫本が「招」とするのに対して、仙覚文永本系が多く「怡」としており、仙覚本の寛元本系と文永本系との間で対立が見られる。より古次点本系を尊重すれば「招」字をとりたいところだが、「歓怡」ではよろこびたのしむ意で文脈ともよく合うのに対し、「歓招」では「招」の意が取りにくいという難点がある。

しかしながら『千字文』に、

欣奏累遣　感謝歓招　（『千字文』187・188）

李暹注「累者、塵累也。謝、往也。逍遙以退、累則往也。感既去、歓楽招而至也」

と「感謝歓招」の四文字があることは見過ごせない。『千字文』の小川本を見ると、「招」字[illegible]は旁の部分が「台」に近く、特に草書の字形[illegible]を参照すれば紀州本の字は「招」と見てよいことがわかる。また『千字文』では「感」の字であって、「戚」の下に「心」がつくが、周知のとおり『萬葉集』では「或」と「惑」

のように、「心」が下につく字とつかない字は異体字としてしばしば通用する。つまり宜の「戚謝歓怡（招）」は、三文字までが『千字文』と一致しており、そのような一致をもつ漢籍は現在他に見出せない以上、ここは『千字文』との関連を子細に検討し直さねばなるまい。

では『千字文』の「感謝歓招」はどういう句であるのか。『千字文』は千のばらばらの文字を組み合わせて四字句でなにがしかの意味のまとまりをなし、またそれが対句を作った上で、全体としては一続きの文脈をなすよう配列するため、中には少し無理な文字の組み合わせもある。(9) 加えて、全ての句を出典をもつ語で綴ることは不可能であるから、出典不明の句もいくつか見える。「感謝歓招」はまさにそういう部分で、たとえば李暹注に語句の注釈はあるが出典の指摘はなく、李暹注を唐宋以降大幅に増広し多数の故事や説話を引用する纂図本『注千字文』(10)にも出典の指摘はない。

対となる前句に「欣奏累遣」とあり、「欣」よろこびが集まれば、「累」わずらい（李暹注「累者、塵累也」）が去るという意である。対句としては上下を違えて、「欣奏」が「歓招」に対応し、「累遣」が「感謝」に対応する。李暹注の「謝往也」「感既去」を参考にすれば、「感謝」は憂いが去ること。続いて李暹注の「歓楽招而至也」によれば、「歓招」は歓びがやってくることである。「感謝歓招」は、「欣奏累遣」と同じく、憂いが去れば歓びがやってくる意とひとまずは捉えることができる。これを古字書によって確認しておく。

「慼」は、「忄」（りっしんべん）のかたちで『篆隷萬象名義』に、

慼　且的反、近也、多二憂懼一也

とある。これは原本系『玉篇』佚文の「戚」の訓詁、

玉、且的反、尚書安国曰、慼、近也、毛詩伝曰、慼、憂也、公羊何休曰、慼、痛也、論語、小人長慼〻、鄭玄曰、多二憂懼一也、字書亦為二慼字一

（『大乗理趣六波羅蜜経釈文』不退転品「親慼」）

と対応する。そのうち「尚書安国曰、慼、近也」は、

周公曰、未レ可三以戚二我先王一　（『尚書』金縢）

とある「戚」の、孔安国伝「戚、近也」を引くもので、親近の意。別の原本系『玉篇』佚文にも、

顧野王、近所二以為一親也

（慧琳音義巻七七・釈迦譜序巻二「親戚」）

と見え、こちらは顧野王の案語と覚しい。小島説が親しむ意としたのはこれによる。続いて「毛詩伝曰、慼、憂也」とあるのは、『毛詩』谷風に、

心之憂矣　自詒伊レ戚。　（『毛詩』谷風・小明）

とあり、その「戚」の毛伝に「戚、憂也」と注するのによる。憂いの意である。また、「論語、小人長慼ミ、鄭玄曰、多二憂懼一也」は、『論語』に、

子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚。戚。　（『論語』述而）

とあり、その「長戚戚」について鄭玄注に「長戚戚、多二憂懼一」とあるのによる。びくびくと恐れるさまを言う。小島説の「上司に対して恐懼する」という解は、この訓詁に導かれたものだろう。もっとも、『千字文』で「戚」は明らかに「歓」と対照されているから、憂いの意で、恐懼する意とは少し異なる。(11)

「謝」も同様にたどってみる。原本系『玉篇』に次のようにある。

謝　似夜反、左氏伝、使二那(不カ)鄭一如レ秦謝レ賄、野王案、説文、謝、辞也、謂二相辞謝一也、国語、子叔声伯如レ晉謝二季文子一、是也、礼記、大夫七十而致レ王、若(事カ)不レ得レ謝、鄭玄曰、謝猶レ聴也、楚辞、歳并謝、与長友、王逸曰、謝、去也

『篆隷萬象名義』に「謝　以夜反、聴也、去也、辞也」と節略されている。そのうち「去也」は、『広雅』釈詁に「謝　去也」とも見えるが、原本系『玉篇』は『楚辞』の、

願歳并謝。与長友兮　（『楚辞』橘頌）

出典としての『千字文』

という部分及び王逸注「謝、去也」を引く。これは、木々が時の変化とともに枯れてなくなることを言い「辞去」の「去」と同じ。『千字文』の「感謝」の「謝」はこの意である。

以上のように、『千字文』の「感謝」を憂いが去ると捉えることは古字書に照らして正しく、「謝、往也。逍遙以退」、「感既去」と解釈する李暹注は適切なものだと言える。(12)

では「歓招」の方はどうか。「歓」はよろこびの意で問題ないので、「招」について見てみる。『篆隷萬象名義』に、

招　諸遥反、呼也、来也、召也、翺翔也　（『篆隷萬象名義』）

と「呼」「召」の意義が見える。どちらも、

招　呼也　（『広雅』釈詁）
招　手呼也、从レ手召声　（『説文解字』）

招魂者、宋玉之所レ作也。招者、召也。以レ手曰レ招、以レ言曰レ召　（『楚辞』招魂・王逸序）

とあるように、呼ぶ、呼び寄せる意で、「招」は特に手で呼び寄せる意である。この行為を、呼び寄せられる対象の側から言うと『広雅』の、

招　来也（『広雅』釈言）

となる。『呂氏春秋』に、

出則以レ車、入則以レ輦、務以自佚、命レ之曰二招摩之機一。

とある「招」について、高誘注に「招、至也」とするのも同じ方向にある訓詁である。

（『呂氏春秋』本生）

したがって「歓招」は、よろこびがやってくる意と取ることができ、李暹注が言うように「歓楽招而至也」と解して間違いない。前句の「欣奏累遣」とも整った対をなす。

宜の書翰の件の一節が、この『千字文』の「感謝歓招」と何らかの関わりをもつならば、『千字文』の四字句をそのまま取ったか、最後の一文字を入れ換えて「招」を「怡」としたかのどちらかということになる。宜の書翰の冒頭部分には、

宜啓。伏奉二四月六日賜書一。跪開二封函一、拝読二芳藻一。心神開朗、似レ懐二泰初之月一、鄙懐除袪、若レ披二楽広之天一。……

とあった。旅人からの書翰と歌を読んで「心神開朗、似レ懐二泰初之月一、鄙懐除袪、若レ披二楽広之天一」と、晴れ晴れとした心境になったと記す。単に嬉しい喜ばしいというのではなく、引かれる楽広の故事中の評、

見レ之若下披二雲霧一覩中晴天上　（『世説新語』賞誉）

が端的に示すように、暗から明への心情の変化を語るものである。件の一節が、ここと対応を持つならば、『千字文』のとおり「戚謝歓招」でなければならないだろう。『萬葉集』本文としては古次点本などの「招」が正しく、「怡」とするのは後世の誤りもしくは文永年間以降の仙覚による意改と判断される。

三

では、なぜ宜は露骨に『千字文』の句を踏まえたのか。同じ宜の書翰中、旅人から贈られた書翰の引用と見られる部分に次のような一節がある。

羈二旅辺城一、懐二古旧一而傷レ志、年矢不レ停、憶二平生一而落レ涙

つとに契沖『代匠記』（精）が指摘するように、この「年矢」は『千字文』の、

年矢毎催　義暉朗曜　（『千字文』237・238）

を踏まえる。年月の推移を矢で喩えることは漢籍に例があるが、「年矢」という語は初唐以前他に見出しがたい[13]。ここは特に『千字文』を踏まえたことが明らかである。そのような旅人の作意を汲んで、宜もまた、それとわかるように『千字文』の句を取り、旅人への挨拶としたと考えられる[14]。

『千字文』の意図的な利用という観点から、ふたたび宜の書翰を見てみると、他にも同様の例が見出せる。先に紹介した王暁平氏の論にも触れられているように、「感謝歓招」の直前に「耽読吟諷」とある「耽読」がそれである[15]。旅人からもたらされた歌や

書翰を夢中で読みふけり誦詠したと述べる。「耽」は、『説文解字』に、

耽　耳大垂也、从レ耳冘声、詩曰士之耽兮　（『説文解字』）

とある。最後に引かれる『毛詩』衛風・氓の例のように、「耽」は基本的に度を越してたのしみにふけることを意味する。それと「読」を組み合わせた「耽読」は平易な表現だが、初唐以前の漢籍に用例が見出しにくい。それが『千字文』にはある。

耽読翫レ市　寓二目囊箱一　（『千字文』197・198）

これは、李暹注にあるように後漢の王充の故事を踏まえた部分で、貧乏であった王充は、市で書物をいわゆる立ち読みして学び博覧強記となったという話である。もととなった『後漢書』巻四十九王充伝には「閲二所レ売書一、一見輒能誦憶」とあって「耽読」という表現はない。宜は、王充の故事じたいは踏まえず、ただ夢中で読んだということを表現するために『千字文』の「耽読」を用いる。これも意図的に『千字文』の文字面を利用したと見てよい。

また宜の書翰中では、旅人の邸宅で開かれた梅花の宴について、

梅苑芳席、群英摛レ藻

と述べる。この「群英」は、すぐれた学者を意味する語で、『文選』に載る書翰文に、

出典としての『千字文』

伏惟明公以二含一之徳一、據二上台之位一、群英翹レ首、俊賢抗レ足

（『文選』巻四十　晉・阮嗣宗〈籍〉「詣二蔣公一」）

と見え、『杜家立成雑書要略』にも、

知、弟広集二群英一、捻追二勝友一　（二十「辱二名客一就知故貸二鶏鵞一書」答）

と見えるように漢籍ではありふれた表現である。『千字文』にも見えることはさして不思議ではない。

既集二墳典一　亦聚二群英一　（『千字文』119・120）

宜の「群英摛レ藻」という部分だけを見れば、『千字文』を出典とするとは言えないが、これまで述べてきたことからすると、ここも宜があえて『千字文』に載る語を意識して用いたと考えられる。『千字文』のその対句部分は、宮殿に三墳五典の書物と多くの優れた学者とが集められたことを表した箇所である。少し踏み込んで解釈すれば、宜が「類二杏壇各言之作一」と「杏壇」の語を用いて梅花の宴を孔子と弟子達の集まりに喩えたのと同様に、『千字文』の「群英」を用いることによって、梅花の宴を、王とその王が招いた英才との集まりに喩える意図があったとも推測されよう。

宜の旅人あて書翰におけるこのような『千字文』の利用のしかたは、先の「夙興」や「南畝」における『千字文』の利用のしか

たとは確かに異なる部分がある。「夙興」や「南畝」の場合、その文字表現の出典はあくまで『毛詩』であって、『千字文』はその抄出要約といった位置にあった。『毛詩』が正式の一次的な典拠だとすれば、『千字文』はより直接的だが隠された二次的な典拠と位置づけられる。つまりそこで『千字文』は類書に近いのである。[16] これに対して、宜の旅人あて書翰では、「感謝歓招」の例が端的に示すように、『千字文』そのものが一次的な典拠として利用されている部分があり、『千字文』が『文選』などの一流の典籍と同等のように用いられているところに特徴がある。東野治之氏によれば、中国では幼学書である『千字文』の評価は低く、それらの字句を正式な詩文の修辞に取り入れたりすることはほとんど見られないという。[17] 宜の書翰では、これとは逆に、『千字文』の表現を引用ともいえるほど積極的に用いており、むしろ『千字文』を踏まえることを誇示する気味さえ感じられる。これは書翰の受け手をことさら童蒙扱いしたわけではないだろうし、ましてや書き手の学力の低さを物語るものでもないであろう。

中国においても、書翰のような実用的な文章においては『千字文』の語句をそのまま用いることにそれほど躊躇はなかったと思われる。たとえば、『杜家立成雑書要略』に、

得レ使二貧士除レ寒、愁人散レ慮（一「雪寒喚二知故一飲書」答）

とある「散慮」は、宴席に相伴して歓楽を共にし憂さを晴らすことをいう。来信の「遣悶」に対応した表現である。「散懐」「散情」「散意」など類似する表現は漢籍に古くからあるが、「散慮」は、まず『千字文』に、

求レ古尋レ論　散レ慮逍遙　（『千字文』185・186）

と見えるのを早い例とする。その後、

玩二文史一以怡レ神、閲二魚鳥一以散レ慮　（『隋書』巻七五劉炫伝「賛」）

言過二洛邑一、聊因二暇景一、散二慮郊畿一　（初唐・太宗「感旧賦序」『文苑英華』巻九一）

林澤之間、聊足二散慮一　（初唐・張九齢「答二厳給事一書」『文苑英華』巻六八七）

などと知識人の文章にもまれに現れるようになるが、『杜家立成雑書要略』の「散慮」は『千字文』より学んだことが明らかで、『千字文』に載る官人熟知の語を用いることは、友人間の書翰文例の表現として相応しいとされたのだろう。『千字文』じたい、

稽顙再拝　悚懼恐惶　（『千字文』219・220）

の「恐惶」のように書儀に頻出の語を挙げることも、その語句の書簡文における利用を促したと推測される。

宜の書翰の場合も、親密な個人間で交わされた文章であること

を考慮したとき、『千字文』の語句をあからさまに用いることは取り立てて幼稚な表現とは言えないだろう。むしろ『杜家立成雑書要略』の例のように、ある程度作法にかなった書翰文の作文方法であったと見られる。特に上代日本において『千字文』を典拠とする語句を用いることは、決して高級とはいえないにせよ、漢籍に典拠をもつことには違いなく、官人層における実用的な場面では文章を飾るための少し気のきいた方法であったと考えたい。

『萬葉集』の歌の「夙興」や「南畝」の表記に見られたように、『千字文』は広く上代のひとびとの教養基盤を形成していた。一方、書翰のような実用的な言わば褻の場面において、『千字文』は表現の資を提供する書物としても活用されていたことが知られた。平易でかつ短句に圧縮した表現であって、しかも知識人に共通の教養であることは、実用的な用途によく適う。そこで『千字文』は、表現に若干のあやをつけることのできる手頃な佳句秀句を集めた、通俗的な佳句集という位置にあると言える。そのような簡便で通俗的な佳句集としての利用のしかたに、上代における『千字文』の、単なる識字教科書にとどまらない性格がかいまみえるように思われる。

注

（1）小稿「『千字文』の受容―『萬葉集』を中心として―」（『美夫君志』八六号、二〇一三年三月）

（2）小島憲之氏『上代日本文学と中国文学』中　第五篇第四章「萬葉集の文字表現」塙書房、一九六四年三月）

（3）東野治之氏『正倉院文書と木簡の研究』「『論語』『千字文』と藤原宮木簡」（塙書房、一九七七年九月）

（4）尾山慎氏「二合仮名と略音仮名に両用される字母を巡って」（『萬葉語文研究』6集、二〇一一年三月）は、「南」一字では二合仮名としてナムと誤読される可能性がありそれを回避するために「畝」を添えたとする。

（5）芳賀紀雄氏『萬葉集における中國文學の受容』「毛詩と萬葉集―毛詩の受容をめぐって―」（塙書房、二〇〇三年十月　初出一九八四年）

（6）太田晶二郎氏「勧学院の雀は　なぜ蒙求を囀ったか」（『太田晶二郎著作集』第一冊　吉川弘文館、一九九一年八月　初出一九七二年）

（7）小島憲之氏『国風暗黒時代の文学』中（上）第二章一「散文の提出する問題」（塙書房、一九七三年一月）

（8）王暁平氏「敦煌文学文献与《万葉集》漢文考証」（『中国文化研究』四六号、二〇〇四年四月）、同氏「敦煌文学と『万葉集』」

（王敏編著『〈意〉の文化と〈情〉の文化――中国における日本研究』中公叢書、二〇〇四年十月）

（9）小稿「『萬葉集』における『千字文』の利用」（『人間環境大学歴史文化環境専攻　藝』一号、二〇〇三年三月）

（10）小川環樹氏・木田章義氏注解『千字文』（岩波書店、一九九七年一月）による。

（11）「戚（慼）」と「歓」との対比は、時代が下るが『太公家教』にも「憂則共戚、楽則同歓」と見える。

（12）『広雅』の逸文に「似夜反、広雅、謝、往也、去也」（大治本玄応音義巻二四・阿毘達磨倶舎論巻一「等謝」）と「往也」の意義も見える。

（13）前掲注9小稿。

（14）谷口孝介氏「吉田宜の書簡と歌」（『セミナー　万葉の歌人と作品』第四巻　大伴旅人・山上憶良（一）和泉書院、二〇〇〇年五月）が述べるように、「羈旅辺城…」の文章が、旅人の書翰をそのまま引用したものではなく、宜が旅人の心情に対する私解を示したものであるならば、宜がこの書翰の所々で意図的に『千字文』の語句を用いたことがいっそう明らかである。

（15）前掲注8王論文。

（16）このことについては、前掲注9小稿にも述べた。

（17）前掲注3東野論文。

〔付記〕本稿は、日本女子大学学術交流研究企画「記紀万葉研究の現在と将来」での講演「文字の異なり、意味の異なり――『千字文』の利用――」（於日本女子大学　二〇一三年三月）の前半部分に基づく。なお、本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C）23520222による研究成果の一部である。

（おくむら　かずみ・奈良女子大学人文科学系教授）

村上桃子『古事記の構想と神話論的主題』の問いかけるもの

上野　誠

はじめに

『古事記』神話の研究は、『古事記』という資料を離れて成り立ち得ない。だから、『古事記』の文字、文、文章の研究であるべきだ。したがって、その研究はすべて、『古事記』というテキストの中で全完結すべきである。私のみるところ、一九八〇年以降、以上のような論法によって、史学からの氏族伝承論（神話の荷い手論）や、民俗学や文化人類学に起源を持つ比較神話学的研究（主に話型論）は、徹底的に攻撃され、ほぼ学界から駆逐された、と思う。たしかに、『古事記』神話は、『古事記』の神話なのだから、海人の語りが、ワニ氏の伝承がここにあるといっても、論証ができるものではない。いわんや、言語を異にする伝承をやである。『古事記』の内部に閉じ籠ることによって、この三十年で、研究の精度は飛躍的に上昇した、と思う。

が、しかし。それは、古代社会において神話はどのような役割を持っていたのか、人間にとって、神話的知とはいかなる意味を持つのかというような問いにあらかじめ封印をし、自らの研究を矮小化していった歴史ではなかったのか。野放図な比較研究を軽蔑し、文献への回帰だけが、ひたすらに叫ばれた三十年。一九六〇年生の私は――自らの非力を棚に上げてのことだが――そう見ている。

本書が、「古事記の構想」に加え、書名の後半に「神話論的主題」と掲げているところに、本書の基本的立場が示されているようである。読了後、『古事記』の構想を見定めることによって浮かび上がってくる、「神話的主題」を明らかにすることを目途として書かれた本であると、私は考えるに至った。だから、私には、本書の方法が懐かしくもあり、かつ新鮮に思われたのである。

一　本書の構成

本書は、京都大学に提出された博士論文に加筆修正、さらには、

村上桃子『古事記の構想と神話論的主題』の問いかけるもの

二つの章を加えて構成された本で、京都大学の若手出版支援を受け、上梓された若き俊英の書である（一九八一年生）。

序章　神話の風景
一　聖なる出産
二　古事記の三巻構成
第一部　三巻構成の方法
第一章　中巻への神話――日向三代
一　祝福された世界
二　神々の往来
第二章　下巻への神話(1)　天之日矛譚
はじめに
一　天と日の主題
二　牛殺しと豊饒――天之日矛
三　新しい「難波」の神話――阿加流比売神
おわりに
第三章　下巻への神話(2)　秋山春山譚
はじめに
一　春と秋
二　春の婚姻――伊豆志袁登売神
三　母の協力――春山之霞壮夫
四　母の制裁――秋山之下氷壮夫
五　「昔」の位置づけ
おわりに――中巻末の構想
第二部　歌われる神話
第一章　応神天皇　角鹿の蟹の歌
はじめに
一　蟹と応神――気比大神とともに
二　道行の意味
三　川の氏族――矢河枝比売
おわりに
第二章　応神天皇　蒜摘みの歌
はじめに
一　野における菜摘
二　神武天皇への遡源
三　譲渡と継承――応神から仁徳へ
おわりに
第三章　石之日売　志都歌
はじめに
一　嫉妬と遁走の意図

二　山代の筒木宮
三　口子臣・口比売の服従
おわりに――古事記における石之日売の造型
第四章　女鳥王　雲雀の歌
はじめに
一　宇遅の女性たち――女鳥王・八田若郎女
二　鳥の名前――サザキ・メドリ・ハヤブサ
三　雲雀の歌
おわりに
第五章　雄略天皇　天語歌
はじめに
一　雄略の系譜――息長氏とのかかわり
二　日の象徴としての若日下部王
三　聖なる盞――大国主神物語との対応
おわりに

から成り、そのあとに、「あとがき」「初出一覧」「本文引用一覧」「索引」が付く。

第一部では、三巻構成の必然性を、中下巻の「日向三代」「天之日矛譚」「秋山春山譚」の新読解から考察するものである。第二部では、『古事記』に登場する歌と、その話の展開の役割を読解しようとするものである。第一部を読むと、なぜこの神話が、この位置に置かれているかを、その神話の読解を通じて明らかにしようとしている。第二部を読むと、歌の表現とその歌の表現が神話の中で機能することの意味がどのように重なりあうのか、考察がなされている。

二　第一部の問いかけるもの

本書の特徴の一つは、三巻の構成を、皇統の展開と、皇統の展開を基礎とした一つの「史観」の表象と見る点にある。したがって、そのまなざしは、常に、上巻末、中巻末の神話に向けられ、それが新しい皇統の出現を語りつつ、次巻に繋がることを説いている。それが、そのまま、「古事記の構想」だというのである。

私が、本書の主眼であると読取したのは、

天之日矛の渡来は息長帯比売命・応神へとつながる系譜を生み出すことで仁徳を血筋の面から保証する。なぜ他の天皇と一線を画し仁徳のための神話が必要となるのか。巻頭に即位する天皇は直前の巻末においてその誕生が語られる。また次の系譜に示すように、神武は海神の、仁徳は新羅の天之日

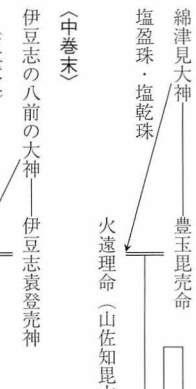
矛の血筋という両者ともに特異な血筋を引く特徴をみることができる。

として、次の系図を掲げるところである。

そして、筆者はこう説く。

このように中巻、下巻始発の天皇は、皇統にとって外部の新たな世界からの血筋を享けることによって保証される。ここには巻頭を拓くひとつの力学をみることができる。

つまり、血筋の継承を、一つの力学としてとらえ、三巻構成の原理のようなものを抽出しようとしているのである。筆者は、物語の展開と三巻の構成は不可分の関係にあると考え、皇統の断絶と継承から説明しようとするのである。なんとダイナミックスな論なのだろう。それは、次の系図をパラレルに示すことによって、読者に大きな問いかけをしているのである。



私は、基本的に、この構想が筆者のいうように『古事記』の構想であることは、認めたいと思う。みごとな指摘だとも思う。

ただし、もし、そう読むのであるならば、『古事記』がどう終結しているのかを語る必要があるのではなかろうか。下巻をどう読むのか、ということを、もっと具体的に示すべきではなかったのか、と思うのである。というのは、系譜においてもっとも大切なのは、今の自分に繋がる直近の過去であると思うからである。つまり、天武朝を終点あるいは元明朝を終点として、推古朝まで

をどうとらえ、構想されているのかということを問わない限り、『古事記』の構想論は完結しないと思うからである。どうであろうか。しかし、さりとて評者に別案があるわけでもないのだが。

三　第二部の問いかけるもの

第二部は、角鹿の蟹の歌の分析の章から始まる。

この蟹や　何処の蟹　百伝ふ　角鹿の蟹　横去らふ　何処に
至る　伊知遅島　美島に著き　鴈鳥の　潜き息づき　しなだ
ゆふ　ささなみ道を　すくすくと　我がいませばや　木幡の
道に　遇はしし嬢子　後姿は　小栗ろかも　歯並は　椎菱
如す　櫟井の　丸邇坂の土を　端つ土は　肌赤らけみ　下土
は　丹黒き故　三つ栗の　その中つ土を　かぶつく　真火に
は当てず　眉画き　此に画き垂れ　遇はしし女　斯もがと
我が見し子ら　斯くもがと　我が見し子に　転た蓋に　向ひ
居るかも　い添ひ居るかも　（『古事記』中巻、応神天皇）

の歌である。この応神天皇の歌は、地名を連ねて旅を表現する道行歌になっており、角鹿（現・福井県敦賀）→伊知遅島（未詳だが琵琶湖の何れかの島）→美島（未詳だが琵琶湖の何れかの島）→木幡（現・京都府宇治市木幡）→櫟井（現・奈良県天理市櫟本町）→丸邇坂（未詳だが、櫟井の地にあった坂の名と考えられている）、というルートで福井県の敦賀から近江を経て、大和への道筋が示されている。この道行歌が、応神天皇の物語のなかで、いかに機能しているのか考察した章である。筆者は、その前の歌である、

一時に、天皇、近淡海国に越え幸しし時に、宇遅野の上
に御立して、葛野を望みて、歌ひて曰はく、
千葉の　葛野を見れば　百千足る　家庭も見ゆ　国の秀
も見ゆ
故、木幡村に到り坐しし時に、麗美しき嬢子、其の道衢
に遇ひき。爾くして、天皇、其の嬢子を問ひて曰ひしく、
「汝は誰が子ぞ」といひき。答へて白ししく、「丸邇の比布礼
能意富美が女、名は、宮主矢河枝比売」とまをしき。
（『古事記』中巻、応神天皇）

に着目し、「木幡」と「巨椋」の関係から、「木幡」の地が、大和の王権にとってもきわめて重要な土地であり、宇治の巨椋池に、木津川（泉川）が流れ込み、淀川へと分岐してゆくため、琵琶湖と近江、山背、大和、摂津、さらには難波への水上交通の物流の

中継地となっていたことを考慮すべきだと説く。その巨椋池に接する木幡と宇治は、日本海、古北陸道と畿内の各地を結ぶ要衝の地であり、応神天皇とその木幡の地を支配する丸邇氏の娘である宮主矢河枝比売が結婚するということは、木幡の地が応神天皇の支配下に入ったと解釈しなくてはならないと説く。

筆者は、ワニ氏が「山背や近淡海の水系を掌握する一族であり、その氏族の嬢子・矢河枝比売と婚姻を結ぶことは王権にそうした畿北一帯の水運支配の力を取り込むこと」を表象する歌であると主張する。そして、「蟹は角鹿の水霊であると同時に海と陸を媒介する存在であり、祝福性をもつ聖なる」ものと位置づけるのである。その上で、「本譚が物語る畿内の水運の支配の完成があり、「蟹の歌は応神自身の記憶を呼び起こし、中巻末における機内の支配体制の確立と充実を物語るのである」という結論を導くのである。

方法としては、直木孝次郎が行った史実反映論ではないものの、ある程度の史実反映を『古事記』に認める研究といえるであろう。テクストが常になんらかの特定の意図をもって特定の何かを達成したという達成至上主義的考え方からすれば、受け入れられぬものであろう。しかし、私は、こういった危険水域を踏むことなしに「神話論的主題」にアクセスすることは不可能であると考える。

第二部は、このように、『古事記』の記述をある程度、ある限度において古代生活の実態の反映と見る立場が貫かれている。この立場を堅持している点も、本書の大きな特徴といえるだろう。果たして、これが、新しい研究の潮流となるのか、注意深く見守ってゆきたい、と思う。

おわりに

かつて、私は、今日の研究状況について、こんなことを述べたことがある。

今日の万葉集研究は、「実証できること／できないこと」、「推考可能なこと／不可能なこと」を厳密に仕分けする。つまり、精緻かつ厳密な研究が志向されているといえよう。こういう研究状況下においては、個々人の研究者は、なるべく不確定な要素を研究に混入してしまわないように細心の注意を払う。つまり、テキストのなかで完結する研究のみを志向するのである。『古事記』『日本書紀』は、別個の文献であるから、その二つの資料を研究者の側が勝手に混合・合成することなど許されない。また、万葉歌の理解も、巻ごとの文脈のなかで理解されるべきなので、表現の特性から歌人論を構

築することも、容認されない。神話の氏族伝承論や、歌の場の論は、今や淘汰されてしまったといってよい。すべては、多元的なものであるとして個別に解釈してゆくのである。

（「万葉集研究と民俗学的思考―シメの話―」『アナホリッシュ國文學』第一号所収、響文社、二〇一二年）

その上で私は、「恐ろしく厳格な研究だが、著しく魅力に欠ける研究、それが今の万葉集研究ではないのか。単に、テキストを純化して解釈してゆくだけでは、豊さや楽しさを失って、痩せ細るばかりではないのか」と状況を批判した。私が本書を読んで感動したのは、筆者が高い学力を有しながらも、あえて危険水域（すなわち、テキストの外からなんらかの知見を持ち込むこと）に踏み込むところである。

最後に、やや瑣末な点を述べれば、序章においては、英雄時代論争について、第二部第三章については、林屋辰三郎らの六御県の論などに詳しく言及すべきであったと思う。そうすれば、さらに論旨が明確になったと思う。が、しかし。縷々述べたように、あえて、今日の研究状況のなかで苦難の道を選んだ筆者には、最大の敬意を払いたい、と思う。

書評文には、書評子の学力試験答案としての意味合いもある。日ごろ、自らの不勉強を棚上げして、妄言を申し述べた。筆者には、ご寛恕を乞う。

（二〇一三年三月　塙書房　A5判　二五四頁　六〇〇〇円）

〔付記一〕　本稿、脱稿後、平舘英子先生の本書書評を拝読する機会を得ました（京都大学大学院人間・環境学研究科『人環フォーラム』第三十三号、二〇一三年十二月）。平舘先生のご書評は、「神話と歴史とはいかなる関係にあるのか。古事記に投げかけられる問いの一つである」という問題設定より、本書を読解するもので、本稿の論旨とも関わります。ご併読を賜りたく存じます。平舘書評は、本書の「神話は歴史の前提なのである」という点を見事に掬い上げられておられます。今、平舘先生の評語を拝し、自らの非力を恥じ入るばかりです。

〔付記二〕　私のごとき無知なる者に、大きなチャンスを与えて下さった各位には御礼の言葉を申し上げたく、著者の村上桃子先生には、評者の無知をお詫びしたく存じます。

（うえの　まこと・奈良大学文学部教授）

報告

○第六十六回萬葉学会全国大会報告

平成二十五年（二〇一三年）度の全国大会は、十月十二日から十四日までの三日間、東京大学を会場として開催された。

（第一日目）

＊公開講演会（東京大学文学部〈本郷キャンパス法文二号館〉一番大教室）

十月十二日（土）午後二時より午後五時まで

学会挨拶　学会代表・京都大学名誉教授　内田　賢徳氏

挨拶　東京大学文学部国語研究室主任教授　月本　雅幸氏

講演

万葉集仮名書歌巻の位置　関西大学教授　乾　善彦氏

畸形の文法―近代短歌における已然形終止法の生成―

東京大学教授　品田　悦一氏

（司会　橋本雅之委員）

みごとな秋晴れのもと、予定の時刻をすこしばかり遅らせて公開講演会が開始された。「すこしばかり」の事情は、予想を超える数の来聴者が受付に殺到したことにある。あえて邪推するなら、憧れの本郷キャンパス内散策に思わず時間を費やした方が多かったのではないか。少なくとも報告者は赤門や安田講堂や三四郎池をカメラにおさめた。法文二号館第一教室は敬仰する碩学とあまたの俊才たちが呼吸した空間だと思うせいか、開会の辞を前に会場内は水を打ったように静まっている。

学会代表・内田賢徳氏の挨拶では、故五味智英氏と故小島憲之氏の友情に触れ東京大学と萬葉学会のゆかりの深さを説かれた。締めくくりは「今回の東京大学での大会が、新しい出会いを実現するように」の予祝。次いで東京大学文学部国語研究室主任教授・月本雅幸氏にご挨拶を賜る。ユーモア溢れるお話しぶりで会場は笑いに包まれるも、話題が関東大震災時のようすに及ぶと、一同思わず身が引き締まる。東大国語研究室で進められた『校本萬葉集』が大震災で全焼したことは周知だが、そのときに使用されたゴム印が今なお保存されているという（これは両日の参加者全員の展観に供してくださった）。燃えさかる火の中からこれを救い出された当時の教官の心中を思いやると胸が熱くなった。

講演ははじめに乾善彦氏、つづいて品田悦一氏。例年に比べれば一気に若返った観がありはするものの、おふたりともこの学会をまさしく牽引している第一線の研究者だ。聴衆の反応を読みながら、ときおり笑いを誘発しつつ、しばしばわれわれの蒙を啓く示唆深い講話を展開してくださった。内容詳細は本誌に掲載され

る論文をご覧いただきたい。

公開講演会に引き続き、第六回「萬葉学会奨励賞」授賞式が催された。今回の受賞者は松田聡氏（文学関係）。選考委員長・乾氏から審査経緯ならびに受賞対象論文について説明があり、内田代表より賞状と副賞が授与された。二年続いて語学関係の該当者がないことは惜しまれる。なお、公開講演会参加者は約一五〇名。

＊懇親会（山上会館地下食堂）

十月十二日（土）午後六時より八時まで

（司会　上野誠委員、西一夫委員）

内田代表挨拶、講演者乾氏、品田氏の挨拶に続き、東京大学月本氏に乾杯のご発声を頂戴して懇親会が始まる。会場の山上会館は、むかし加賀前田家江戸屋敷の山上御殿が建てられていたところで、三四郎池に臨む高地にある。歴史を感じさせる重厚な建物内にボリューム満点の料理が並び、約八〇名の参加者が二時間におよぶ懇親の輪をひろげた。小野寛氏、毛利正守氏ほか各位のスピーチはそれぞれに楽しく、恒例にしたがって翌日の研究発表者による抱負の弁、奨励賞受賞者の喜びのことばなどが心に刻まれ、和やかな時間が経過してゆく。来年度の会場を引き受けてくださる、天理大学・川島二郎氏もお声を聴かせてくださった。

今回の全国大会は編輯委員・鉄野昌弘氏のお世話により実現したもの。鉄野氏にとって母校とはいえ、着任一年目の大会開催はさぞご苦労があったはず。東大のスタッフの方々、また大学院生のみなさんのあたたかいご支援を得て、かように盛況な一日目を閉じることができた。お開きを前に鉄野氏から紹介された大学院生諸氏が上代文学研究の最先端を疾走する日は遠くないだろう。

（第二日目）

＊研究発表会（東京大学文学部〈本郷キャンパス法文二号館〉一番大教室）

十月十三日（日）午前十時より午後五時まで

午前の部（午前十時より）

『記』『紀』髪長媛物語における歌謡物語としての差異

ラ・サール学園　橋本智史氏

宣命作成過程における語の選択

―「緩怠（怠緩）」「公民」をめぐって―

川崎医療福祉大学　根来麻子氏

上代における「ため」の下接語

大阪大学　蔦清行氏

（司会　佐野宏委員）

午後の部（午後一時より）

日中間で見解の異なる海石榴はツバキ・ザクロのどちらか

帝京大学　木下武司氏

巻四「相聞」柿本朝臣人麻呂歌三首―三様の女性像―

大妻女子大学　倉住薫氏

『万葉集』の語る〈歴史〉をめぐって

―巻一・巻二の歌ははたして「ほぼ年代順に配列」されているか―

UCLA　トークィル・ダシー氏

（司会　白井伊津子委員）

『懐風藻』編者をとりまく文筆状況　早稲田大学　高松寿夫氏

仙覚本における「読み」の展開

―文永三年本と文永十年本の異同をめぐって―

明治大学　山崎健司氏

（司会　奥村和美委員）

今回は研究発表に多数の申し込みがあり、結果として八名の方に発表をしていただいた。やむをえずお断りした方にはこの場を借りてお詫び申しあげる。しかし、研究成果の公表に意欲的な若手研究者が多数あることは喜ばしく心強い。例年に増して考察対象も方法も多彩であり、パワーポイントを用いた発表は本学会では初めて、さらに海外から参加の発表者もあった。発表者への敬意と称賛をこめて厳しい質問が浴びせられるのは例年のことだが、今年は若い方による積極的な発言も目立ち、これまた心強く感じられた。内田代表の簡潔明快な挨拶をもって二日目の行事は終了。「お弁当事故」など会場校にはいろいろご苦労をおかけしたが、刺激に満ちて実に有意義な二日間であった。（影山尚之記）

（第三日目）

「臨地調査研究」は「東京湾岸を行く」と題して下総から相模へと東京湾岸を巡る調査研究となった。祝日とあって集合場所のJR両国駅西口は八時過ぎにもかかわらずゆったりと時間が流れていた。募集人員よりもやや多く、補助席を利用しての出発となる。予定時刻通り八時三十分に駅前をバスは下総国分寺へ向けて出発した。

今回の案内役は、大会の準備を進められた東京大学の鉄野昌弘編輯委員と、古代の東海道に詳しい藤沢市役所郷土歴史課の荒井秀規氏にお願いする。

駅前を動き出したバスは、京葉道路に入る。その時正面には鼠小僧の墓などがあることでも知られる回向院がたたずむ。鉄野氏が院生の時にアルバイトをしていたのも両国周辺とのエピソードが紹介され、和やかな秋晴れのなか一路バスは西へ向かい荒川と江戸川を渡って市川へ入り、最初の見学地である下総国分寺付近に到着。緩やかな坂を進むと住宅街の中に国分寺の伽藍が現れた。堂宇に当時の面影は見られないものの、残る礎石を見ながら鉄野氏の解説を聞いていると、足下には布目模様の瓦片が散在してい

ることに気づく。

その後、秋晴れの中を徒歩で手児奈霊神堂を目指す。下り坂の道の木々の間から眺望できる景色も印象的で、昨日まで行われたのであろう秋祭りの後片付けに汗を流す地域住民も姿は現代であるが、そこには「古き日本の祭」を感じさせる風景があった。車通りの道を随分と長い列を成して移動し、最後尾を気にしながら亀井院の手児奈が水を汲んだという真間の井を見ながら手児奈霊神堂についてみると、手児奈伝説について坂本信幸氏が解説をしておられた。赤人作と虫麻呂作の真間娘子を詠んだ作品を取り上げて丁寧な解説がおこなわれた。手児奈霊神堂からは和洋女子大学の仁平道明氏が合流された。

真間の継橋を見学して弘法寺に向かう。目の前には弘法寺へ至る石段が長く続く。ようやくのこと上り江戸川方面に眺望が開けると、それまでの疲労感も感じられなくなった。住宅が建ち並ぶ風景になったが、資料集に引かれた『江戸名所花暦』の「国府台断岸之図」を幻想できそうな広々とした景観である。弘法寺は天平の僧行基が開基したとされ、その後弘法大師空海が七堂伽藍を建立したと言われる由緒ある寺院である。

さらに歩を進めてバスが待つ和洋女子大学まで移動する。当初は予定をしていなかったが仁平氏の勧めで、氏が館長を務める和洋女子大学文化資料館へ足を伸ばす。校舎の高層階にある資料館からの関東平野の眺めは格別で新宿の高層ビル群や赤城山、さらに天気がよければ富士山や筑波山も望むことができるという。

仁平氏にお見送りいただきながらバスは相模国を目指す。当初の出発時間を超過しての出発であった。その後、首都高速を利用して東京湾岸を移動する。

昼食会場である横浜中華街への到着は予定を一時間超過していた。駐車場からは横浜中華街揚州飯店の方の案内で移動するが、休日とあって中華街は大混雑。全員が無事に揚州飯店までたどり着けてほっとしたのも束の間であった。前菜から一皿毎に料理が各テーブルに運ばれてきたのである。本格中華の昼食に満足しながらも時計を気にしながらの昼食となった。途中で午後から勤務校の会議に出席のため山崎健司氏が都内へ戻られる。少し遅めの昼食を済ませ、中華街の散策もそこそこにしてバスが中華街を出発したのは午後二時半を過ぎた頃であった。昼食時から藤沢市役所郷土歴史課の荒井氏も合流された。

横浜横須賀道路（通称横横道路）に乗って左手に東京湾の碧い海、右手に三浦半島の緑の木々を目にしながら、荒井氏より古代の東海道についての解説を聞く。東海道の変遷や遺構の状況など、専門知に基づくわかりやすい解説からは氏の穏やかな人柄を感じ

る。目指す走水の記紀神話にも言及され、古代の道から知られるヤマトタケルの物語に思いを馳せる。やがてバスは後半最初の見学地の走水神社に到着。記紀のヤマトタケル物語に登場する地名走水は現在の浦賀水道であり、その名を冠する神社は弟橘姫とヤマトタケルとを祭神とする。現在は東京湾を航行する多くの船舶が行き交う地である。神社からは房総半島が見え、距離の近さを実感した。その時、木製の大型船が手漕ぎで浦賀水道に漕ぎ出す姿が見られた。古代の東海道を幻想した瞬間でもあった。一行が参拝を済ませた頃にバスは観音崎で折り返して来ているはずであったが、なかなか姿を見せず、心配は募るばかりであった。

最後の見学地金沢文庫へ向かう。すでに予定時間を一時間以上超過しての進行に日暮れは迫り、帰宅の時間を気にされる方もちらほら。金沢文庫到着は四時を回っていた。職員の方のはからいにより時間延長で見学をさせていただく。多くの文書や仏像を丹念に鑑賞しながらも資料集に紹介された金沢文庫での特別展「国宝文選集注と唐物玩具」の図録を求める姿があった。西の山々に日が差し入ろうという頃に到着したが、文庫を出る頃には足下も暗くなっていた。遠方からの参加者の幾人かはここで京急金沢文庫駅から新横浜駅を目指す。帰宅の交通の確認に慌ただしさが現実となった。残りの一行を乗せたバスは首都高湾岸線を疾走して最終解散地であるＪＲ横浜駅に六時到着。少々時間は押したものの、晴天の東京湾を下総・相模と廻り、本格中華で腹を満たした一日旅行であった。

旅行の準備に奔走された鉄野氏、和洋女子大学の仁平氏、藤沢市役所の荒井氏、さらには資料作りで協力いただいた東京女子大学の瀧口氏、東京大学院生の鈴木氏と山崎氏に感謝申し上げる。

（西一夫記）

予告 1

○萬葉一日旅行

本会では、恒例により「萬葉一日旅行」を左記の要領で開催いたします。ふるってご参加ください。

日時　平成二十六年五月十日（土曜日）

集合　午前九時三〇分。近鉄天理駅改札口付近（JR桜井線〈万葉まほろば線〉と隣接）。

行程　天理駅→石上市神社→在原神社→高良神社→人麻呂歌塚・和爾下神社→東大寺山古墳→櫟本高塚公園（昼食）→和爾坐赤阪比古神社→帯解黄金山古墳（舎人親王墓伝承地）→崇道天皇陵（一次解散、午後三時半頃）→奈良交通バスで奈良駅（二次解散、午後四時半頃）

（なお、当日の天候等によりコース変更、また解散が遅れる場合があります。）

参加費　無料

解説　坂本信幸氏（萬葉学会編輯委員・高岡市萬葉歴史館館長）

上野　誠氏（萬葉学会編輯委員・奈良大学教授）

その他　事前申し込みの必要はありません。雨天決行。弁当持参。全行程徒歩のため歩きやすい服装・履物でご参加ください。（なお、旅行中の事故等につきましては、本会では責任を負いかねますのであらかじめご了承ください。）

会員の皆様へは先に案内をお届けしておりますが、記録としての意義を鑑み掲載しています（編集部注）。

予告　2

○萬葉学会第六十七回全国大会

二〇一四年（平成二十六年）度、第六十七回の萬葉学会全国大会は、天理大学との共催により、左記のように開催する予定です。

記

開催日

十月十一日（土）午後　公開講演会（天理大学）・懇親会

十月十二日（日）全日　研究発表会（天理大学）

十月十三日（月・祝）～十四日（火）　臨地調査研究

主な目的地　石上神宮、大和神社、阿太峯神社、八咫烏神社、河口頓宮（関宮）跡推定地、波多神社、的方など。香落渓温泉泊。

公開講演会（予定）

奈良女子大学名誉教授　奥村悦三氏

奈良女子大学名誉教授・高岡市万葉歴史館館長　坂本信幸氏

○研究発表者募集

内容　上代の言語・文学に関する各分野の研究

時間　発表三十分・質疑応答十五分

応募締切　二〇一四年六月三十日（月）

研究発表希望の方は、題名・氏名・所属を明記の上、要旨（八百字以内）を添えて

萬葉学会本部（関西大学文学部国語国文学専修合同研究室）

あてにお申し込みください（封筒に「発表申込在中」と朱書きしてください）。なお、発表をお願いする場合には、あらためて九月一日（月）までに要項集の原稿作成をお願いいたします。　以上

○現在**編輯委員会**は、次の十九名によって構成されています。(五十音順)

乾　善彦	上野　誠	◎內田賢德	大島信生	奥村和美
垣見修司	○影山尚之	坂本信幸	佐野　宏	白井伊津子
鉄野昌弘	西　一夫	芳賀紀雄	橋本雅之	蜂矢真郷
村田右富実	毛利正守	山崎健司	吉井　健	

(◎学会代表、○編輯委員長)

このたび、本学会のホームページを公開することになりました。『萬葉』のバックナンバーや大会・行事の案内等を掲載する予定です。URL は以下の通りです。ぜひご覧ください。

http://manyoug.jp/

編輯後記

○いつも遅れがちになってしまいますが、二百十七号をようやくお届けします。本号には論文二編と書評一編を掲載しました。うち、品田氏の論考は昨年の全国大会における講演内容を原稿化してくださったもの。奥村氏論文は投稿原稿です。

○「予告」に記しましたとおり、本年度の全国大会は天理大学を会場として開催する予定です。会場校はもとより、天理市にあっても準備に着手していただいています。昨年同様の充実した大会となるよう努めますので、多数のご参加をお願いします。

○四月一日より本学会のホームページを公開しています。大会や行事日程を掲示するほか、発行から三年を経過した本誌バックナンバーの閲覧がここから可能になります。ぜひご活用ください。

○同じく四月一日から消費税率が8パーセントに引き上げられましたが、本会会費をそれにあわせて値上げすることはしませんでした。しかし、現行の会費は昭和五九年刊の第百十八号以来変更していません。当時と同じ会員数を維持しているわけではありませんから、いずれ見直しの時期が来るものと思います。ご理解とご協力をお願いします。

○本会元編輯委員、専修大学名誉教授橋本達雄氏が昨年十二月十日に逝去なさいました。享年八十三歳。謹んでご冥福をお祈り申しあげます。（影山尚之）

◇お願い◇

1　論文の投稿、書籍・論文の御寄贈は、学会本部あてにお願いいたします。

2　年会費の納入および入会申込みは、そのむねを明記のうえ会費を郵便振替で「〇〇九〇〇―七―二九一四七　萬葉学会」あてにお送りください。

3　住所変更・改姓等の届出、本誌既刊号の購入等は、清文堂出版内　萬葉学会事務室あてにお願いいたします。

投稿規程

一、投稿資格は、会員に限る。

一、内容は、萬葉集とそれに関連する各分野の研究論文とする。

一、分量は、原則として四百字詰め原稿用紙四十枚程度（ただし「黄葉片々」欄は十枚以内）とする。

一、投稿に際しては、原稿四部（コピー可）を学会本部宛に送ること。ただし、原稿は返却しない。

一、ワープロ原稿の場合は、字詰め・行数及び四百字詰め原稿用紙に換算した枚数を明記すること。論文採用の場合には、テキストファイルの提出をお願いする。

一、採否決定は、編輯委員会に一任のこと。

一、論文掲載の場合は、本誌十部を贈呈する。ただし、余分に入用の時は、あらかじめ申し出があれば実費でこれに応ずる。

一、掲載された論文等の著作権は、執筆者に帰属する。ただし、本誌「萬葉」の再版、電子化公開等については、執筆者の許可を得ないで学会が行うことができるものとする。

萬葉学会会則

一、本会は、萬葉学会と称する。

一、本会は、萬葉集とそれに関連する各分野の研究を目的とする。

一、萬葉研究者・愛好者は誰でも申込みによって会員になることができる。

一、会員の研究発表機関誌として季刊「萬葉」を編輯・発行する。

一、本会は、年一回、公開講演会・研究発表会・臨地調査研究を中心とする全国大会を行い、表彰制度を設けるなど、随時、目的に沿う事業を行う。

一、会員は、年額四千円の会費（誌代を含む）を年度初め（四月）に納入する。

一、本会の本部を
大阪府吹田市山手町三丁目三番三五号
関西大学文学部国語国文学専修合同
研究室内（郵便番号五六四―八六八〇）
に置く。

一、本会の運営及び機関誌の編輯・発行は編輯委員会において行う。

一、本会に代表を置く。

萬　葉　第二百十七号
平成二十六(二〇一四)年五月二十五日印刷
平成二十六(二〇一四)年五月三十一日発行
頒価　一、〇〇〇円
送料　六〇円
564-8680吹田市山手町三丁目三番三五号
関西大学文学部国語国
文学専修合同研究室内
編輯・発行　萬　葉　学　会
代表者　内田賢徳
振替〇〇九〇〇-七-二九一四七
542-0062大阪市中央区島之内二丁目八番五号
清文堂出版株式会社内
発売所　萬葉学会事務室
manyo@seibundo-pb.co.jp